
R a g n a r o k ? ウロボロスの刻印

葉月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ragnarok

? ウロボロスの刻印

【Nコード】

N3776W

【作者名】

葉月

【あらすじ】

万物の素マナの恩恵を享受し、繁栄する世界・アルカディア。

創世の時代、この世界の始まりから終わりを予言した女神フォルト

ウナが

ラグナロク

詠んだ世界終焉。一人の少年の命によってそれが阻止されてから、

世界は永きにわたって平和が続いている。

その少年、”シリウス・クライン”は最期を迎えたはずなのだが、何の因果か自分が死んだ場所で再び目を覚ました。

そして彼はかつての相棒からとんでもない事実の数々を聞くことに。
しかも驚くことに、世界は彼が死んだ日から二千年の時が流れてい
て……？

Character (前書き)

お待たせしました。登場人物紹介です。
あまり話が進んでないので多くはありませんが、一応載せておきますね。

(話がある程度進むにつれて、このページは更新していきます。)

※まだ本編を読まれてない方は、これをご覧になる前に本編を読んでください。ネタバレが多少あります。

Character

*Shrius klein

シリウス・クライン

Sex…male

Age…15 Height…167

Weight…53

アルナイル王国軍第一師団長。階級は少将。

漆黒の髪に青い左目、右目には黒い眼帯を着けている。

”黒騎士”の異名で畏れられる剣豪であり、世界トップクラスの魔術の使い手でもある。

マリア王女とは相思相愛の仲だった。

女神フォルトウナが予言で詠んだ”ラグナロク世界終焉を消滅させる可能性のある唯一の存在”。

人々の間では英雄として現在は信仰されている。

*Kyle Prentice

カイル・プレンティス

（シリウスと同様）

何故か再びの生を与えられたシリウス。ロゼットのアドバイスにより、髪の色と名前を変える。

名前はかつての部下の1人からそのまま拝借し、髪は青くした。

取り敢えず職に就くために、王立レグルス魔術学院へと入学するが…？

怪しまれないために、一応火属性の魔術しか使えない設定にした。

＊Rosette

ロゼット

（人間実体化時）

Sex…female

Age…？ Height…157

Weight…？

マナ高密度結晶”グロツタイ聖象核”から造られた人工生命体・ホムンクルス造魔。

人間に実体化している時は、シルバーホワイトの長い髪にアメジストの瞳をした美少女。左耳の上に黒い薔薇の造花を付けている。

何故シリウスを”マスター”と呼ぶようになったのかは不明。

使える魔術の属性は、闇を除いた七つ。

人間に実体化している時以外は、エンゲル・カッツェ翼猫に実体化している。

＊Maria S Arunairu

マリア・シャロン・アルナイル

Sex…female

Age…17 Height…162

Weight…47

二千年前のアルナイル王国第一王女。亜麻色の美しい髪に王家の証であるエメラルドの瞳をもつ。
シリウスとは恋仲だったが、自身の17歳の誕生日の翌日に亡くなってしまう。

その美しい容姿とは裏腹に結構お転婆なところがあるらしい。

＊Wisteria S Arunairu
ウイステリア・ステフ・アルナイル

Sex…female
Age…15 Height…155
Weight…42

マリアの異母妹。第二王女で王家の証である、蜂蜜色の髪にエメラルドの瞳をもつ。

まるで悲劇のヒロインのように後世に伝わっているが、実際はかなり性格の悪い悪女だった。

シリウスのことが好きだったが、マリアと相思相愛だったために二人とも亡くなった後、捏造しまくってシリウスと自分が相思相愛の仲だったことにした。

＊Leonhard Fargus

レオンハルト・ファーガス

Sex…male

Age…15 Height…171

Weight…58

カイルのクラスメイトであり、ルームメイト。

風属性の魔術の使い手。

実は公爵子息だが、話し方はそれっぽくない。兄と姉がいる。

金糸雀色の髪に浅葱色の瞳の美少年。だが本人無自覚な為、想いを寄せる少女達が報われることはない。

明るく好奇心旺盛な性格が災いし、トラブルを起こすことも。

*Florence Elliott

フロレンス・エリオット

Coming soon

序 インガンノ（前書き）

はじめまして、葉月と言います♪初投稿の小説初チャレンジです。
初心者なので下手ですが、暖かく長い目で読んでください。

＊この小説は葉月のオリジナルです。ゲームの二次創作ではありません。
せん。ありがちな設定なので、
もしかしたら同じような小説があるかもしれませんが、パクってません。ご了承ください。

ではどうぞ☆

序 インガンノ

《太陽と月が古よりの大いなる灼熱に焼き尽くされ、七つの楔が解き放たれん時……》

世界終焉「ラグナロク」が始まりを告げるだろう……―》

Ragnarok

？ ウロボロスの刻印

序 インガンノ

シリウス・クラインにとって「死」というのはそれほど恐れているものではなかった。

逆に愛しき存在がこの世を去ってから、早くそれを迎えたいと思っている。

だから表情が穏やかなのだろう。抵抗感など全く無く、一刻も早く彼女のもとへ向かいたかった。

長く度重なる戦闘の中で汚れた軍服で汗を拭う。
冷たい風が頬に当たった。

「ルキフェル…お前も俺も…ここで死ぬ…」

そう言っても目の前にいる者の表情は全く変化しない。

シリウスは、もしかしたら自分と同じようにこの者も思っているのではないかと一瞬思考を巡らせたが、すぐに我に返り自分の正面に手を翳した。

次の瞬間シリウスの手から溢れんばかりの光が放たれる。

「これで…やつと…」

死への歓喜を感じながら、そっと目を閉じた。悔いはない。彼女が愛した世界を守って逝けるのだから…。

薄れいく意識の中でぼんやりと浮かんでくるのは彼女の歌。自然と口ずさむ。

心地良い。

死ぬとはなんて気持ちがいいのだろう。

「ありがとう…」

何かと何かがぶつかる音がする。

そして何かはじけ、意識は消えていった……—

序 インガンノ（後書き）

序章でした。なるべく期間を空けずに頑張りますのでよろしくお願
いします。何かあればご感想を書いていただけると嬉しいですよ☆

&1 t; 1 & g t; 邂逅

>1<邂逅

鳥のさえずりが聞こえてくる。とても暖かく気持ちがいい。

自分はどうなったのだろうか？シリウスは重たい瞼を開けた。
何処からか光が差し込んできている。

体を起こして周りを見渡すと、見たことのない美しい風景が広がっていた。

もしかしてここが俗に言う天国とやらなのかもしれない。

まさか生きている間、両手で数えても足りないくらい人を殺していた自分が天国に来るなんて思ってもいなかったが。

「天国…本当にあったんだな…」

確かに此処は自分が15年ほど生きた世界とは思えなかった。
精霊と契約する関係で世界の端から端まで旅したことがあるが、こんな楽園のような場所はなかった筈。

それに何ともいえない違和感を感じる。

辺り一面色とりどりの花が咲き、空には鳥が飛んでいる。
聞こえてくる水の音が心地よい。

ふと彼女のことを思い出された。誰よりも優しく、誰よりも明るい彼女。

もし此処が天国なら……

そう思うといってもたってもいられなくなって、その場から立ち上がった。

見る限りではこの場所はかなり広い。探すのは大分かかるだろう。自分以外の人間がいないのが先ほどから気になっていたが、もしかしたら別の場所へと向かっているのかもしれない。

「ねえ」

ふいに後ろから声が聞こえた……

後ろを振り返ると、ローズピンクの髪を風になびかせている女性が、自分を見て微笑んでいた。

透明な水瓶を抱えている女性はやはり自分が生きた世界の存在だとは思えない。

しかもかなり背が高かった。

シリウス自身は平均身長とさほど変わらない筈なのに、この女性を

見ていると何だか自分がとても小さく思える。

「此処は天国なんかじゃないわよ」

先ほどから背の高さばかりに気をとられていたシリウスはその言葉で我に返った。

「天国じゃない…?」

「そうよ。生き物が死んで魂が還る場所ではないわ。…還るという点で似てるかもしれないけれど」

あの瞬間確かに自分は死んだ。では一体此処は何処だというのだろうか？

「訳が分からないわよね。…でも御免なさい。私の口から話すことはできないの。」

そう言うと彼女は表情を曇らせた。
だがそれは一瞬うちに先ほどの穏やかな微笑みへと変わる。

「もう時間みたいね。…また会えるのを楽しみにしてるわ」

その言葉に首をかしげる。

何かを口にしようとしたが、視界が霞み段々と風景が消えていったため、それは叶わなかった。

「カルデア様…貴女の愛し子に幸あらんことを…」

最後にそんな言葉が聞こえた気がした。

<> ; 邂逅（後書き）

読んで頂きありがとうございます。感想、ご指摘は感想まで。

&1 t; 2 & g t; 再来

最初に感じたのは草の匂い。

次に感じたのは風が頬を撫でていることと、自分を呼ぶ声だ。

『…ター!!…マスター!!』

自分をこう呼ぶ存在をシリウスは一人しか知らない。

…案の定目を開けると、そこに見えたのは思ったとおりの顔だった。

>2<再来

長いシルバーホワイトの髪に輝くアメジストの瞳。

左耳の上に付けてある黒い薔薇の造花。

「ロゼット…?」

それを聞くと自分を心配そうに覗きこんでいた少女の顔が、一瞬にして嬉しそうな表情へと変わる。

『良かった…気付かれたんですね…』

「此処は…?」

『ヴィーグリーズです。貴方がルキフェルと戦った…』

どおりで見覚えがあった訳だ。

いや、そんなことより今は…

「何で俺…」

生きているんだ…？

先ほどまでいた楽園のような場所は、やはり夢だったのだろうか。
もしかしてルキフェルを滅ぼせていないのか。

言い様のない不安が頭の中を過った。

『大丈夫です。ルキフェルはもういません。』

そんなシリウスの心のうちを察したのか、ロゼットは穏やかな声色で告げた。

しかしだったらなおのこと分からない…

死んだ筈の自分が生きている理由が。

だってあの「無限の光」アイシ・ソフ・アウルを使う為には自身の命を捧げなければならない。

ルーチェ…光の精霊もそう言っていたのだ、間違いないだろう。

（だったら何故……？）

此処は自分が15年生きた世界で間違いない。
それにルキフェルは滅ぼせたらしい。
頭の中が混乱していく。

「そういえば…」

先ほどから思考を巡らせていたシリウスが呟いたのを聞いたロゼットが、顔をシリウスの方へ向ける。

「今日って……？」

シリウスがそう言うと、ロゼットの笑みが強張るのが見えた。

どうしたのかと不思議に思いながら、シリウスは目を細める。

暫くの沈黙の後、意を決したらしくいつになく真剣な表情で、ロゼットは言葉を紡ぎだそうとしていた。

それを見たシリウスは仰向けになっている状態から体を起こす。

普段優しい彼女だが、戦闘の時と真面目な話をする時に笑った事がないからだ。

きっと今回もそうなのだろう。

『落ち着いて聞いて下さいね』

この表情は最近見た気がした。

（あの夜の前の日だったか…？）

思考は違う方へとんでいたのだが、次の言葉でそれらが嫌でも停止した。

『今日はプリマヴェーラ1の3の日…ですが、貴方がルキフェルと消滅した日から二千年たっているんです…』

&l t; 2 & g t; 再来（後書き）

何だかよく分からない単語が出て来はじめてしまいました…

話が進んだら設定集を載せたいと思っているので、どうかお許し下さい（泣）では次のお話で☆

ご指摘やご感想よろしくお願いします。

&l t; 3 & g t; 虚空

『今日はプリマヴェーラ1の3の日…ですが、貴方がルキフェルと消滅した日から二千年たっているんです…』

…―自分は何処かで頭を打ったのかもしれない…

> 3 < 虚空

間抜け面とはまさしく今の自分の顔を指すのだろうとシリウスは思った。

自分の顔は自分では見えないが、そうに違いないという絶対の自信がある。

何故なら目の前にいるロゼットが何とも言えない苦笑をこぼしているからだ。

この少女が過去に苦笑をこぼしていたのを数えるのは片手があれば充分。

つまり、かなり珍しいことだったのだ。

「…悪い、俺耳が悪くなったらしい。もう一度頼」

『ですから貴方が亡くなられてから二千年たっているんです!』

シリウスが最後まで言葉を発する前にロゼットはそう言った。

：どうやら別に自分の耳が悪くなった訳でも、脳がおかしくなった訳でもないらしい。

しかし、何故それほど長い時間がたっているのだろうか。

一応王立学術院を首席で卒業した筈なのだが、こういう時に頭は明確な答えを出してくれない。

どんなに考えを巡らせても全く無駄な気がして、早々にこの疑問について思案するのを放棄した。

暫く思い耽っていたシリウスが沈黙を破る。

「ロゼット、俺が死んだ：正確には“消えた”かもしれないが：とにかく、あの後から今までのこと話してくれないか：？」

それを聞いたロゼットは一瞬驚いたようだったが、すぐに笑みを浮

かべた。

『分かりました。私が知っていること全て貴方にお話しします。』

そう言うとロゼットは目を閉じ、語るように話始めた：

暗闇の中に音が響く。

靴の音だろうか。

『お疲れ様、ε。…どうだった？』

『”例のモノ”ならメンカリナンの研究施設にありましたので、ベ
…
ηに取りに行かせました。』

『流石。やること早くて助かるよ。情けないが、ボクも同胞達程で
はないけれどまだ楔に縛られている身だからね。』

『いえ、まだかの日までかなり時間がありますから大丈夫ですよ。

』

『でもボクは早く彼に会いたいんだ……あーあ……元気にしてるかな？………シリウス♪』

鈴の音のような笑い声が辺りに響いた。

<3> 虚空（後書き）

読んでいただきありがとうございます♪感想、ご指摘は感想の方へ。では次のお話で会いましょう☆

&l t; 4 & g t; 史実

現在より二千年前……

P a s h i f i s 1 8 9 1

I n b i e r u n o ? — X X X V I k a r d i a

この日、世界に唯一存在する国家アルナイルの王都プロキオンでは盛大な祭が催されていた。

女神フォルトゥナが詠んだ世界終焉「ラグナロク」が阻止され、世界救済の日となったからである。

> 4 < 史実

誰もがその瞬間を待ちわびていたことだろう。

アルナイル王国現国王、フレデリック・ブライアン・アルナイルとその妻ナルシサス王妃、二人の娘である第二王女ウイステリアが民衆の前に姿を現した。

彼らの登場に先ほどもで騒がしかったこの場に静寂がもたらされる。

国王は咳払いをひとつしてから口を開いた。

「皆も知っているとおり、創世の時代に女神フォルトウナによって予言されたラグナロクは阻止された」

民衆の歓声が響く。

「しかし、誰がこれを阻止したのかを知らない者がほとんどだろう……」

国王の言葉によって民衆の歓声が止んだ。

その言葉どおり、彼らはラグナロクが阻止されたことは知っていたが、実際にどういう経緯でそこに至ったかは全く知らなかったので、一語一句聞き逃すまいと耳をすませている。

「この世界を救ってくれたのは、我が国の軍人であるシリウス・クライン少将。彼が命を懸けてくれたおかげで、我々は生きていられる。クライン少将の存在はフォルトウナの予言に記されていた……唯一ラグナロクを阻止する可能性がある者として……。」

すると、国王の隣に立っていた第二王女ウイステリアが口を開いた。

「シリウスは自分が予言に記された存在であるからと言って、自分が犠牲になることを受け入れ、最後に見た時も穏やかな表情をしていました。」

ウイステリアのエメラルドグリーンの瞳が少し潤んでるように見え

る。

「彼はとても優しかった…私がお姉様が亡くなり落ち込んでいた時も…励ましてくれたりして…私はいつしかそんな優しい彼のことを愛するようになりました…彼も私のことを愛していると言ってくれたのですが…私と彼は身分が違い結ばれることはないけれど、近くにいてくださるだけで嬉しかった…でも…彼は逝ってしまった…」

ウイステリアは唇を噛み、何かに耐えているようだった。

彼女の瞳から一筋の涙が流れている。

「……だから私は彼が救ってくれたこの世界を守りたいのです。…それが私に出来る彼への精一杯のお礼だと思いますから…」

暫くの沈黙の後、何処からか拍手の音が聞こえてきた。

その後続くように段々と拍手の音も大きくなっている。

気付けばこの場にいる全員が、彼女に賛同するように拍手していた。

「皆さんありがとう！」

ウイステリアは涙を白いレースのついた布で拭い、笑みを浮かべる。

「シリウス様万歳！！ウイステリア殿下万歳！！アルナイル王国万

歳！！」

人々は声を揃えて救世主と彼女と国を賛美した……

これが後世に語り継がれていくことになる「ウイステリア王女の涙の演説」である。

そして次の日から年号は新世暦「レムリア」となった。

新しい時代の幕開けである。

人々はシリウス・クラインを英雄として崇め、彼を忘れることはなかった。

時代が新世暦となって7年後、
ウィステリアは女王として王国を治めていくことになる。

彼女が良き統治者であった為か、その後アルナイル王国は繁栄の一途をたどり続けているのであった……………―

&l t; 4 & g t; 史実（後書き）

こんな駄文を読んでいただきありがとうございます。感想・ご指摘
待ってますのでよろしく頼みますっ☆

&l t; 5 & g t; 想起

美談？ いや冗談だろう？

> 5 < 想起

途中から話を聞くことを半ば放棄していた気がする。

真剣に話してくれている
ロゼットに対して、失礼なことをしている自覚はあったが。

彼女が話しているのはあくまで
” 史実 ” のことであって、
断じてその史実の中で誰かが
言っていた言葉の真偽については触れようとしなかった。

苦々しい表情を浮かべながら
話す顔を見れば一目瞭然だが、
どうやら彼女も自分と同じ
らしいことが窺える。

第二王女ウイステリア、
正式名ウイステリア・ステフ・アルナイル。

第一王女マリアとは腹違いの
姉妹だった。

マリアの母エリノア王妃は、
マリアを産むと程無く息を引き
取ったらしい。

その一年半後に後妻として
迎えられたのが、当時王国議会
にて多大な発言力を有していた
ヴィンセット氏の長女ナルシサスだった。

アルナイル王国には国の中枢
となる国家機関が二つある。

一つはアルナイル王国軍、もう
一つは王国議会だ。

軍は治安維持、議会は政治と

裁判を担当している。

どちらとも統制者は国王となっているが、それが有名無実であることは軍人や貴族の間では暗黙の了解とされているのが現状だった。

アルナイル王家の者の婚約者は軍と議会が交互に選ぶことになっている。

表向きの理由は”権力集中を防ぐ為”らしいが、大多数の人間はそう思っていなかったらしい。

エリノア王妃は軍側を選んだ人物だった。

となると必然的に次の王家の者の婚約相手を決めるのは議会側ということになる。

しかしエリノアが亡くなるという不測の事態となったため、二つの機関の間ではフレデリック王の次の婚約を巡っての争いが起こることとなる。

軍側は”交互といっても同じ人物ならそれは適応されない”と主張し、

対して議会側は”同じ人物であろうと原則は守られるべきだ”と真逆の主張をした。

何しろ前例の無い事態だったので、争いの決着はつかずこのまま永久に堂々巡りが続くかと思われたが……

エリノア王妃が亡くなって約一年三ヶ月後、軍側が手を引くという形で決着がついた。

こうしてナルシサスは王妃となったのである。

フレデリック王とナルシサスが結婚してから一年後に彼女の娘であるウイステリアが誕生した。

ウイステリアは容姿は王妃
そっくりだったが王である
父の色が遺伝し、王家の証でも
ある蜂蜜色の髪にエメラルド
グリーンの瞳をしていた。

ウイステリアの異母姉である
マリアは瞳の色はエメラルド
グリーンだったが、
髪の色は亡き母エリノアと同じ
綺麗な亜麻色である。

王家の決まりとして、王位継承
権はその時の国王もしくは
女王の直系親族にしか与え
られない。

フレデリック王の場合、
祖父母・父母が既に亡くなって
いる為、継承権を持つのは
娘であるマリアとウイステリア
だけだった。

マリアが姉であるので第一王位
継承権を持つのは彼女だが…

議会側はより王家の血を濃く
受け継ぐウイステリアこそ
第一王位継承者に相応しいと
考え、ウイステリアに第一王位
継承権を与えるよう王家に
求めてきた。

だがフレデリック王も馬鹿
ではない。

彼は人格者であったため、

”原則は守らなければならない”
と、議会側の要求を拒否した。

（その時に大層晴れやかな
笑顔で”そう言っていたのは
誰だったかな？”と付け加えた
らしいが）

これに舌打ちをしたのは
ナルシサス王妃の父、
ヴィンセット氏だけだった
という。

『マスター?』

その声でシリウスは
我に返った。

『私の話聞いてました…?』

一瞬焦ったが、持ち前の
ポーカーフェイスで
やり過ごす。

「当たり前だろ、ちゃんと
(途中まで) 聞いてた。」

ロゼットは疑わしげな目を
シリウスに向けていたが、
ため息を一つくとまた
真剣な表情になった。

『一応事実上で私が知っている
ことはこれくらいですね…』

「そうか、話してくれて
ありがとな。」

ロゼットは小さく微笑んだ。

二千年前の王族ウイステリア・ステフ・アルナイル……―

悲劇のヒロインとして歴史上
ではまるで聖女のように
語られている存在……

実は大層ご立派な悪女で
あったとか。

&l t; 5&g t; 想起（後書き）

何かどんどん話を進める度に
話が長くなってる気が……

多分次からこの話より
長くなると思いますが（笑）

こんな駄文を読んでもいただき
ありがとうございます。

初心者なので多分変な表現や
誤字脱字があると思いますが、
そういう場合は感想の悪い点
のところに書いていただけると
ありがたいですね：

もちろんご指摘以外にも
感想や質問等でも結構ですので
どうか宜しく願います！

<6>白黒

マリア王女とは似ても似付かない。

>6<白黒

腹違いの姉妹とは外見があまり似ないものなのだろうか。

初めてフレデリック王の息女であるマリアとウイステリアが同じ場に姿を現した時、シリウスは最初にそう思った。

確かに姉妹は半分同じ血を受け継いでいる筈なのに、唯一の共通点はエメラルドグリーンの瞳だけ。

もし何も知らされずに、ウイステリアが今いるマリアの私室に現れたとしたらきっとマリアの妹だとは気付かなかっただろう。

現に今でも半信半疑で、珍しく呆然としていた。

「シリウス？」

その声で我に返る。

「具合が悪いの？ そうなら
治療士^{ヒーラー}を

呼ばないと！」

マリアのエメラルドグリーン
の双眸が、不安そうに揺れていた。
シリウスはそれを見て小さく
微笑する。

「そんなに心配なさらなくても
大丈夫ですよ。少し気が
抜けてしまっていただけ
ですから。」

それを聞いて安心したのか、
マリアはほっと胸を撫で
下ろした。

「良かった、またあの時みたい
になったらどうしようかと
思ったのよ？」

マリアはその顔に優しげな
微笑みを浮かべる。

シリウスは彼女のその表情が好きだった。

初めて会った時から表情豊かな人だったが、優しげに微笑む彼女を見ていると不思議と穏やかな気持ちになれる。

”亡きエリノア王妃は優しい微笑みを浮かべる人だった”
というのを軍に入隊したばかりの頃、上官がよく言っていた。

あの当時は気にもとめていなかったが、今では時々マリアがこの優しげな微笑みを浮かべる度に、”エリノア王妃もこんな表情をしていたのだろうか”と思案を浮かべるようになる時がある。

「何時まで人を待たせる気でいらっしゃるのかしら？」

場の空気が水を打ったように

なった。

声の主、ウイステリアはかなり
イライラしているらしく、
端正な顔を不快そうに
歪めている。

「人を呼んでおいてこの扱い：
正直、どのような教育を貴女が
受けられているのか疑いたく
なりますわ!!」

”この扱い”とは何だ？

そう言う自身も同じ教育を
受けているのではないのか？

頭の中でそれらが巡っている
のだが声に出す訳にも
いかず、顔を少し歪めるだけに
止まった。

この時シリウスは、初めて
”自分に拍手したい”と思った
という。

高圧的な物言い、嘲るように
鼻で笑うその仕草…

” 蛙の子は蛙 ”

この言葉の意味が今、よく
分かった気がした。

まさにナルシサス王妃と
ウイステリアのことだろう。

「あら？ 確か貴方は…」

ウイステリアの不快そうな
表情が消えていた。

「はっ、アルナイル王国軍部
第一師団副師団長、シリウス・
クライン大佐であります！」

一応軍に属する身としては
無視するわけにもいかなかった

ので、取り敢えず儀礼的に
挨拶を返す。

ウイステリアの顔に笑みが
浮かんでいた。

どうも嫌な予感がする。

シリウスはその予感が外れて
くれるよう、普段信じても
いない神に祈った。

「貴方があの有名なクライン
大佐ですよ！？」

その祈りはどうやら届かな
かったらしい。

顔を輝かせるウイステリアの
後ろで、苦笑を浮かべている
マリアが見えた。

「ヴェスパ―准将から貴方の
御活躍をいつも聞かせて
頂いてますわ！！」

これまでにこんなに
上官を恨んだことがあった
だろうか？

いや、なかっただろう。

「綺麗な漆黒の髪、澄んだマリンブルーの左目、右目についている黒い眼帯、そして何より端正な顔：やはり私のイメージどおりの方ですね」

きつと自分の頭の上には疑問符が浮かんでいることだろう。

状況に頭が付いていてない。

というか、マリアに向けていたあの怒りはどこにいったのだろうか？

とてもじゃないが、先程怒っていた少女と同一人物とは思えない。

それから三十分後、
勉学の時間が始まるまで

ウイステリアはシリウスと
（一方的）に話していた。

これが他の人物だったら
彼はすぐに席を外して
いただろうが、相手は
国王息女、そんな真似は
出来ない。

「では私はそろそろ行きますわ」

ウイステリアは椅子から
立ち上がり、スタスタと
扉の方へ向かっていった。

「ウイステリア、また来て頂戴。」

マリアが微笑むと彼女は
後ろを振り返り、最初に見せた
不快気な表情をする。

「”また”はあり得ませんわ。
だって：」

最後まで言葉を紡がず、
彼女は口を閉ざす。

「やっぱり何でもないですわ。
それではさようなら、
”御姉様”。」

気恥ずかしかったのか、
ウイステリアは乱暴に扉を
開けてマリアの私室を
出ていった。

それを見て嬉しそうにマリアは
微笑む。

シリウスは心の内で
この異母姉妹は外見だけ
じゃなく、性格も
全く似てないらしいと、
最初に思ったことを
訂正した。

だが彼らは知らない。

ウイステリアの言葉の
真意を。

彼女が氷のような冷笑を
浮かべていることを。

それが知られるのは二千年以上
後になってからだった。

&l t.; 6 & g t.; 白黒（後書き）

こんな駄文を読んで頂き
ありがとうございます。

ご感想、ご指摘、質問等は
感想まで。

ではまた☆☆

&l t; 7 & g t; 独知

それを見たのはこの場で自分だけだっただろう。

>7<独知

色々捏造され過ぎだ。

もし自分がその「ウイステリア王女の涙の演説」とかいうのを聞いていたとしたら、吐き気を催していたことだろう。

いや、今話を聞いていただけで実際吐き気を催したのだが。

シリウスは最早怒りを通り越して呆れかけていた。

ウイステリア・ステフ・アルナイルに。

よくここまで話をでっちあげたものだ。

確かに自分には愛する人がいた。

でもそれはウイステリア王女ではない。

亜麻色の髪に美しいエメラルドグリーンの瞳を持つ：

マリア・シャロン・アルナイル王女だ。

彼女と共にいられることがシリウスにとって一番の幸せだった。

穏やかに笑う彼女の顔が浮かぶ。

彼女に会えたら自分のきつとこの（某王女を蹴り飛ばしたいほどの）怒気さえ消えてしまうに違いない。

だが先程から気になっていたことがあったため、一旦思考を巡らせるのを止めた。

「ロゼット。」

「何ですかマスター？」

ロゼットは不思議そうに首を傾げる。

「おまえはどうしてたんだ？」

妙にウイステリア王女の演説のところだけ彼女は詳しく語ってくれた。

その他はまるで本を読んでいるように感じられる。

「まさか二千年もの間独りで……」
きつとそうではないことは分かっていたが。

「違いますよ。」

ロゼットは小さく微笑した。

「私はウイステリア王女の演説をその場で聞いていたんですが……」

何故なのだろう。

造魔^{ホームクルス}というマナ高密度結晶”^{グロツテイ}聖象核”から造られた人工生命体であるロゼットには不可解だった。

ウイステリア王女が泣きながら（多分嘘泣きだろうが）話していたことは、ほぼ偽り言である。

自分の敬愛する主と愛し合っていたのはウイステリアではなく、そ

の異母姉であるマリア。

だからウイステリアに”愛している”などと言う訳がない。

それに、マリア王女が亡くなってからの彼女は落ち込んでないなく、むしろそのことを嬉しがっていた。

彼女の話していたことで一つ本当のことがある。

ウイステリアが自分の主を愛していたということだ。

どうもそういう関係の：自分に向けられる好意（それはもう造魔である自分も驚くほど）に鈍かった彼は不思議そうにしていたが。

何故話をでっちあげる必要があったのだろう。

先程の疑問がまた頭を過った。

ただ主：シリウスに感謝の言葉を述べ、”彼の救ってくれた世界をこれからも守っていこう”という感じのことを言えば良かったのだ。

その前のくだりは要らないだろう。

それが真実ではないなら尚更だ。

「シリウス様万歳！！ウイステリア殿下万歳！！アルナイル王国万歳！！」

思案していたロゼットはその声で我に返った。

きつと自分以外は全員そう言っていただろう。

その証拠に隣に立っている男が怪訝そうにこちらを見ている。

ウイステリア王女へ目を向けると彼女は可愛らしい笑顔をしていた。

これで本当は氷のような冷笑を浮かべる少女なのだから驚きである。

ロゼットが暫くウイステリア王女を見ていると、彼女の表情に邪悪な笑みが浮かんだ。

だがそれは一瞬で、すぐに先程の可愛らしい笑顔に戻った。

怖い…

それは自分に危害を加えてくる存在に対して抱く感情だと主が教えてくれた。

それを自分は確かに感じたのだ。

ウイステリア王女が自分に今のところ危害を加えてくる存在ではない筈なのに。

確か3年前ぐらいに魔物に襲われそうになっていた幼い少年を助けた時に、その子は泣きながら怖かったと言っていた。

少年を襲おうとしていたのは”フレスベルク”という鷲の姿をした巨人の魔物。

防衛手段を持たない幼い少年にとっては、自分の生命を脅かす存在だ。

（これがマスターの言っていた”怖い”という感情なのか。）

泣いている少年を慰めながら、ロゼットはそう思った。

では一体、自分が今感じたのはなんだというのか？

ウィステリア王女はフレスベルクのように、生命を脅かす存在でもなく、異形の者でもない。

むしろ彼女は大変美しい。

人々の歓声がロゼットにとっては不協和音に聞こえた。

だがそう感じているのは自分独りでだけだろう。

人々の世界を救った救世主と、王女と国を賛美する声は止まない。

自分以外のこの場の全ての存在が遠くに思えた。

気付けばロゼットは人混みを押し退け、人々の歓声に包まれたその場から踵を返して、王都の出入口である門へと向かっていた。

自分の中に残る”怖い”という感情を振り切るように、前だけを見るようにして。

&l t; 7 & g t; 独知（後書き）

こんな駄文を読んでくださってありがとうございます。

また訳の分からない単語が出てきて大変ですよね：

もう少し話が進んだら設定などを載せるので、お待ちください。
では次話でまたお会いしましょう！

&l t; 8 & g t; 孤影

何故死ねなかったのか…

> 8 < 孤影

『それから私は…マナの粒子となって消えるつもりでした。』

ロゼットは悲しげに目を伏せる。

『マスターのいない世界なんて、意味がないと思ったから…』

彼女は憂いを帯びたアメジストの瞳をシリウスの方へ向けた。

その瞳は僅かに潤んでいるようにも見える。

『どうせなら最後にマスターが消えた場所で私も消えたかったので、
此処…ヴィーグリーズの地へ来たんです。』

何も無い場所だった。

かつてこの地で世界の命運を巡る激戦があったかどうか疑う程に。

何処までも続く海が側に見え、水平線を見ることができこの孤島は美しいとロゼットは思う。

（私はこんな美しい場所で消えることができるのですね…マスター）
腕の中にある主の形見達を握りしめる。

それらは黒い眼帯とエメラルドのロケットだ。

ロケットを開くと、シリウスとマリア王女が穏やかに微笑んでいた。

この写真を撮った時には今の状況を二人は思いもしなかっただろう。

（もし、本当に天国というものがあるのなら…）

あの二人がどうかそこで幸せになれますように…

マナの粒子となる自分はきつと其処へは逝けないだろうが。

（マスター：貴方に会えて本当に良かった）

夜明けが近づいている。

聞こえてくる波の音が自分の不安を消していくようだった。

『さよなら』

次の瞬間ロゼットの体が光に包まれる。

その光はとても心地よく、ロゼットの意識は朧気になってきた。

マナに還るということはこういうことなのだろうか。

自分が溶けていく感じがする。

（ありがとうございます…どうか…）

光は消え、何もなかったかのように静かに草花が揺れていた…

『それからどれくらいたったか分からないですけど、ある時声を聞いたんです。』

「声？」

『ええ…何と言っていたかは覚えていないのですが。』

ロゼットは苦笑する。

『気が付くと私は此处に立っていました。マナの粒子となっていた筈なのですが実体化して…』

消えた筈だったのに、何故か生きているということにシリウスは最初、戸惑いしか感じていなかった。

暫くすると、自分の奥深くから沸き上がる絶望が、思考を支配してくるのだ。

何故死ねなかったのか？

あの光に包まれた時、シリウスは安堵していた。

だからこそ、再び此処で目覚めた時はこう思ったのだ。

ロゼットが何となく悲しげな顔をしているのもシリウスには分かるような気がしていた。

『それから私は王都へ行きました。…でも私の記憶に残る場所とは違っていて…それで調べてみたら…』

「信じられない程長い年月が経っていた…ってことか。」

彼女は頷き、表情を引き締めた。

『王立図書館にはかなりの書物がありましたから…』

アルナイル王立図書館。

アルカディアで最多の蔵書数を有する図書館である。

シリウスも勉学の為かなり足を運んでいた。

貴重な書物なども保管されているため、警備も厳重で身分証明書がないと入ることは許されない。

はずなのだが…

(二千年経った今でもあるんだな…)

…いやいや、そうじゃなくて。

「ロゼット、おまえどうやってあそこに入ったんだ？ 確か身分証明書がないと入れないんじゃない？」

まあ、二千年の間に規則が変わるのなんて普通だが。

取り敢えずそこは言わないで、ロゼットの返答を待ってみる。

『はい。二千年前と変わらず、身分証明書がないと入れません。』

「じゃあだったら…？」

ロゼットの顔が途端に呆れたような表情になる。

実際呆れているのだろう。

彼女は溜め息をついていた。

『マスター…私は造魔ホムンクルスですよ。いつもみたいに、翼猫エンゲル・カツツエに実体化したんです。』

造魔は高密度のマナを具現化させた”聖象核グロッテイ”を生命エネルギーとする人工生命体。

その存在には魂が定着する肉体はなく、言うなれば魂自体が肉体のようなもの。

自身を構成するマナの組み換えをすることが出来、人間からはたま竜などにも実体化する。

存在自体がマナそのものの為に不死であるとされ、人々には恐れられていた。

ロゼットの場合、大体は人間の姿に実体化していたが、たまに翼猫にもなっていた。（彼女が言うには、いつも違う生物に実体化する造魔はほとんどいないらしい）

「で、おまえは飛んで侵入したと」

『そうですよ。中に入ってからはかなり楽しかったし。』

頭を抱えたくなくなる。

一体いつからこんな（悪い方の）いい性格になったのだろうか。

色々言いたい気持ちを抑えてシリウスは口を開いた。

「なあ、ロゼット。」

『なんですか?』

「俺も王都に行きたいんだ。」

&l t; 9 & g t; 異彩

> 9 < 異彩

賑やかな王都の商店街の隅に、ひっそりと建っている店があった。

そこは染髪剤を売っており、プリマヴェーラの期間が書き入れ時なのだが、数年前に新しい染髪剤店ができてからはこの店には閑古鳥が鳴いている。

店主の男は長い溜め息をついた。

代々継がれてきた家業だが、もうそろそろ終わりなのかもしれない。

この頃は全くと言っていいほど収入がないからだ。

二年前、軍のお尋ね者が店を訪れた。

そのお尋ね者は巷ではかなり有名で、当然店主も知っている。

一瞬通報しようかと思ったが、商品売ってからでも遅くはないと考え直し、取り敢えずこの場は黙っていることにした。

そのお尋ね者の男は鳶色の染髪剤を手にとって暫く眺めていた。

鳶色の髪の間人とはそこらじゅうにいますので、確かにあの目立つ赤っぽい髪よりはいいのだろう。

店主がそう思いながら男を見ていると、鳶色の染髪剤を眺めていた

男の鋭い双眸が店主の方へ向いた。

「おい。」

低い唸るような声。

「は、はい…なんでしよう…?」

店主の声は震えていた。

「いくらだ?」

「…25000ゴルトですが…」

それを聞くと男の眼は今までよりもさらに鋭くなった。

「25000ゴルトだと…? 染髪剤にしては高すぎるな。安くならないのか…?」

「で、ですが…アルカン・ラッテ貴重な変色鼠の毛が使用されていますので…どこの店でも最低でもそれくらいかと…ヒィ!」

店主の首筋には刃が当てられていた。

「余計な理屈はどうでもいい。…安くするのか、しないのか?」

当然ここで安くしなければ、間違いなく自分は御陀仏だろう。

この男はきつと躊躇しない。

「20000ゴルト…では?」

男は刃を首筋に当てたままだ。

「12500ゴルト…本来の半分ならい、いいでしょう…!?!」

男はようやく店主の首筋に当てていた刃を下ろした。

そして男はカウンターに懷からだしたゴルトを乱暴に叩きつけ、鳶色の染髪剤を持って店から出ていったのである。

そう。それからこの店にはあまり公に行動できない者…犯罪者が訪れるようになった。

ただでさえ新しい染髪剤店が出来て客足が途絶えてるというのに、こうなってしまったので最層にしてくれていた客も寄り付かなくなってしまい、店主は困り果てていた。

たまに店を訪れる客もあの男のように値段を下げると脅してくるし、散々な目にあっていたのでもう店を止めようかと毎日三回は思っていた。

チリリン…

店主が毎日恒例の悩みを思案していたときだった。

来客を知らせる鈴が鳴ったのである。

店主は緊張のあまりに顔が強ばっていた。

今度の客は何者だろうと考えを巡らせながら。

この前の客は窃盗犯、その前は…確か…強盗犯だっただろうか…。

ゆつくりと店の扉が開かれた。

「い…いらっしやいませ。」

店主の声が少しだけ嬉しそうに聞こえる。

まあ無理もないだろう。

店主が見る限りでは久しぶりに見るまともそうな客だったからだ。

シルバーホワイトの長い髪に輝くアメジストの瞳をした少女。

左耳の上に付けてある黒い薔薇は造花だろう。

しかも大変美しく、この寂れた店にはあまりあっていない。

貴族の子だろうか。

『すみません。青系の色が欲しいんですけど…』

店主は少女の声で我に返った。

「青系ですか…こちらですね」

さすがはプロということなのか、次の瞬間には店主の顔には柔らかな笑みがうかんでいた。

『青系だけでもこんなにあるんですね…』

隣に立つ少女が驚いたように言った。

「そうですね…お客さんに合わせるとなると…」

そういえばこの近辺でこの髪の色は見たことがない。

「お客さん、染髪剤使ったことないんですか？」

そう言うと、少女は不思議そうに首を傾げた。

『はい。使ったことはないですけど…』

この反応を見る限り、この少女が染髪剤を使ったことが無いというのは本当だろう。

では、一体少女はどここの生まれなのだろう。

隣で悩んでる少女を見て店主はそう思った。

『じゃあこれにします。』

暫くの間悩んでいた少女が手にとったのはマリンブルーの染髪剤だった。

失礼だが少女のアメジストの瞳にはあまり似合わない色だろう。

「お客さん。青系の色がいいならもっと違うものも…」

少女は何か言いたげな店主の様子がわかったのだろう。

カウンターに向かっていた足は止まり、店主の方へ振り返った。

『これ、私が使っくんじやないんです。』

店主は声を出すのをこらえていた。
今まで店をやってきた中で、使う本人が選びに店に来なかったのは初めてだ。

いや、あったとしても普通何を買うか代わりに店に行く人に伝えるのではないだろうか。

この少女は青系の色が欲しいと言っていた。

彼女に買い物を頼んだ人物はあまり見た目を気にしないのかもしれない。

『お会計したいんですけど…?』

店主はカウンターにいつの間にかいる少女の声を聞くと、はっとな
ってカウンターへ行った。

「25000ゴルトです。」

少女は小物入れからゴルトを出すと、カウンターへ置いた。

「ありがとうございました。」

店主がそう言うのと少女は綺麗に微笑んだ。

店主は思わず見とれてしまい、少女が店を出ていったことにも気付
かなかったとか。

…まあそんなわけで久しぶりのまともな客で、しかもかなりの美少女だったため、店主はその日大層ご機嫌だったらしい…。

決して少女は” まとも ” と言い難い存在なのだが、そんなことを店主が知るわけもなかった。

王都のとある宿屋の一室。

『マスター、これでいいですか？』

「いいんじゃないか。こんなもんだろ。」

鏡の前に座っているのは、マリンブルーの髪とそれと同じ色の左眼、右眼に黒い眼帯を付けている少年。

『これで大丈夫ですね。』

そう言うときロゼットは横に置いてあった容器を手を取った。

『どうやら三ヶ月後にまた染めないと色が落ちてきてしまうみたいですね。』

「面倒くさいけどしょうがないな。」

マリンブルーの髪の少年：シリウスは苦笑した。

何しろ二千年前はこんな物はなかったし、今は役に立っているので何とも言えない。

アルナイル王国、王都プロキオンにシリウスとロゼットの二人が着いたのは昨日。

”王都に行きたい”というシリウスの申し出にロゼットは快く了承し、彼を乗せて王都に行けるよう天馬^{ベガサス}に実体化した。

王都に着いたのは夜。まさか天馬に乗っているところを見られる訳にもいかないため、人気のない道でロゼットには人間に実体化してもらい、王都まで歩いたからだ。

とりあえず夜遅いこともあって行動するのは明日からにすることにし、宿屋に泊まったのだ。

？シリウス・クラインは人々の中では英雄とされているので、決して正体がバレないようにすること。

？黒髪の人間はこの時代にはいないため、二人きりか一人きりのときしかフードはとらないようにすること。

？どうやら肖像画があるらしい（初耳だ）ので、怪しまれないようにすること。

これらがロゼットが話した注意事項だ。

まさか二千年前に死んだ人間が生きてるなんて誰も思いはしないだろうと、半分聞き流していたのだが。

それが間違いだったことは王都に入ってから分かった。

ロゼットの言う通り、人々は自分のことを異常なまでに信仰していた。

そしてやはりあの史実も信じられていた。

それに肝を冷やした出来事もあった。

宿屋を探す途中で王都のシンボルである時計塔を見ようと顔を上げたら、フードが落ちてしまい男に見られてしまった。

幸い夜だったし、男も酔っていたので：

「坊主、お前の顔どっかで見たことあるんだよな…髪は黒に見えるが…？」

『彼の髪は青ですよ。夜ですからそう見えるんじゃないですか?』

咄嗟に気を利かせてくれたロゼットのおかげでなんとか誤魔化せたらしく、

「そうみてえだな。」

と言って男は去って行った。

…その後宿屋でロゼットにシリウスが説教されたのは言うまでもない。

そして今日、ロゼットに”染髪剤”というのを買ってきてもらい今に至る。

ようやく行動できるようになったので、シリウスがどこに行こうかと思案していたところ、ロゼットがそれを遮るように言った。

『マスター、出かける前に貴方にお話しておきたいことがあります。

』

シリウスがロゼットの方を向くと、いつになく彼女は真剣な表情をしていた。

『この時代の魔術関係についてです。』

シリウスは自分が息を呑むのが分かった。

&l t; 9 & g t; 異彩（後書き）

前の話の2倍ぐらいはあったんじゃないでしょうか？

どんどん増えてきますよね（笑）

さてこんな駄文を読んでくれている方々、本当にありがとうございます。

お気に入り登録をしてくださっている4人の皆さんもありがとうございます。

これからもどうぞよろしく♪

※本文中に出てくる”ゴルト”とはドイツ語で金という意味です。
アルカディアのお金の単位です。分からなかった方すみません。

<10> 変移

この世界アルカディアは万物の素・マナであらゆるものが構成されている。

故に物が廃るのがかなり遅い。

二千年前に描かれたどこぞの英雄の肖像画が残っている（描かれている本人は初めてそれを知った）のがいい証拠だ。

シリウスが予想していたよりも、あまり王都の様子は変わってなかった。

勿論、言語や建造物もだ。

おそらく、アルナイル王国は今も昔も世界に存在する唯一の国家だったたので、戦争する相手もない。

大規模な天災も聞く限りでは起きていない。

だから二千年という長い時間が経っても、そんなに差異はないのだろう。

しかし、不変があれば可変があるのが条理で…。

>10<変移

シリウスの生きた時代では”魔術”というものは差異はあれど、一般的に世界に存在する全生物が行使できるものだった。

…だが現代はどうも違うらしい。

”魔術”とは空气中に存在するマナを生物が、”吸収・変換・放出”というW・ラジアン博士が提唱した”魔術発動における三大過程”を行うことで初めて行使できるもの。

博士の論文によると、その三大過程の際に必要な体内機能を、一過程に一つずつ…つまり三つ全生物は有しているらしい。

裏を返せば、その体内機能を三つのうち一つでも持たない生物は、魔術を行使出来ないということになるのだが。

しかし、二千年前は普通に誰も彼もそこらへんの野良犬でさえ、魔術を行使出来ていたため、誰もそんなことは気にしていなかった。

…そう、あくまで二千年前までは。

ラグナロク
世界終焉が阻止されて以降、世界は危機に陥ることもなく永きにわたって平和が続いている。

そのせいかどうかは不明だが、その三つの体内機能は段々と劣化し始めていった。

現在では三つの体内機能を全て有する生物は全体の半分だと言われている。

それに、一生物が行使出来る魔術の属性（光・水・火・風・地・氷・雷・闇の全八属性）も少なくなっているらしい。

二千年前は、多いなら全属性、少なくとも四属性は使っていた。

ところが現代では魔術を行使出来る存在が激減したせいなのか、普通なら一属性、稀に二属性使える存在がいるだけ。

魔術はどうやら大幅に後退したらしい。

『さらに契約召喚術が途絶えてしまったみたいなんですよね…』

魔術の種類としては、”攻撃術”、”結界術”、”治癒術”、”転移術”、”契約召喚術”、”補助術”の計六つ。

一般的に全属性を使うことが出来れば、六つの種類を全て行使することが出来る。

勿論シリウスは全属性を使うことが出来るので、六つの種類を全て使える。

昔から光の属性である治癒術を使うことが出来る存在は少なかったため、使える者は”治癒術士”^{ヒーラー}として重宝されていた。

きっと現代ではただでさえ少なかった治癒術士の数も、かなり少なくなっているだろうが。

契約召喚術とは、人間が精霊や妖精、神獣（天馬や翼猫、竜などの獣）などに魔力（三つの体内機能を動かす精神エネルギー）を対価として契約し、必要な際に召喚するもの。

個々の魔力の高さによって、契約できる存在は違う。

それでも大体の人間が使えるものだった。

「契約召喚術そのものが無くなっているとはな…」

シリウスは真剣な表現で呟いた。

本当に魔術は後退している。

『はい。…それに転移術も使い手は世界中で十にも満たないそうです。』

…訂正、本当に魔術は”凄まじく”後退している。

転移術とは、名のとおり簡単に言うところワープすることだ。

とは言っても時空を越えることは出来ない。

ある場所から他の場所まで一瞬で移動する、という感じか。

子供でも短い距離なら出来る術だ。

「ん？待てよ…ということは精霊の存在は…」

『現代では精霊はお伽噺…の存在だと文献で読みました…。』

…お伽噺？

そんな馬鹿な。

間違いなく自分は目を見開いているだろう。

ロゼットが苦笑いを浮かべている。

「八大精霊もか？」

『そう…みたいです…』

属性のマナがあるからこそ、魔術が使えるというのに…

精霊の存在が本当にお伽噺だったら…

あり得ない。

現に自分は八大精霊全てと契約をしている。

「後退するにも程があるだろ…」

自然と溜め息がこぼれる。

『そろそろ出かけましょうか。』

見かねたロゼットが声をかけた。

カイル・プレンティス

この時代で生きていくと決めたシリウスが考えた偽名だ。
まさか天下の英雄様の名前で過ごすわけにはいかないだろう。

（偽名と言っても、部下（年上だが）の名前をそっくりそのまま拝借しただけだが）

ロゼットにはもつとこだわったほうがいいと言われたが、変にこだわった名前を付けて反応できなかったりすると困るので、聞きなれた名前にしておいた。

これからどうするか。

シリウスとロゼットが直面した問題だった。

差し当たって、金銭の方は問題無い（何故かかなりのゴルトをロゼットが持っていた）

一カ月ぐらいなら持つだろう。

しかしそれから後が問題だ。

金銭が底をついたら宿屋にも泊まれないし、食べ物も買えない（造魔であるロゼットは食べなくても生きていけるから、自分だけだが）。

飢え死には御免だ。

かと言って再び人生が与えられた以上は、目覚めた時のように死ぬことしか考えないでいるのは死んでいった戦友に申し訳ない。

そう悩んでいたシリウスにロゼットが提案してきたのが：

『商店街を通った先：王立図書館の近くですね。』

「でも本部は王都じゃなくて違うところにあるんだろ。ここで大丈夫なのか？」

『本契約はどこのギルドに配属するのかが決定してからでいいそうですから、大丈夫みたいですよ。』

そう、ギルドだ。

ギルドとは魔物の討伐、護衛、物品の売買など様々な入り込んでくる依頼をこなすいわゆるなんでも屋だ。

とは言っても、近年では各ギルドで扱う依頼が専門化してきているが。

ギルドなら多少身元がよく分からない人間でも雇って貰えるし、依頼に合った報酬が依頼者から貰えるので、今の自分にぴったりの仕事だ。

それならばと、早速申請をするため二人は今ギルド協会のプロキオン支部に向かっている。

「俺は魔物の討伐専門のギルドとかがいいかな。向いてそう。」

ロゼットが持ってきたパンフレットを見ながら呟いた。

元々自分は軍人だし、戦闘系のギルドが向いている。

…そういえば目が覚めてから一回も魔術を使っていない。

「後でやってみるか…」

「おい知ってるか？昨日メンカリナンの第一研究所に賊が入ったんだってよ。」

一人考え事をしていたシリウス：いやカイルの耳に入ってきたのは、男のこの言葉だった。

「賊？何か取られたのか？」

「ああ。この間なんとかっていう遺跡から発掘された結晶がな。」

メンカリナンとはここ王都プロキオンの南東に位置する街だ。
学問の街としても有名で、多くの研究施設が存在する。

カイルは幼い頃を思い出すので、あまり好きな街ではなかったが。

「結晶って、チャニング教授が言っていたあの…？」

「それだ、それ。マナの純度がすげえ高いって言ってたやつだ。」

「でも賊って…。第一研究所はその結晶があるからって、軍が第四師団の半分の警備にあててたんじゃなかったか！？」

「でも入られたんだ、たった一人の賊にな。」

「ひ、一人！？」

アルナイル王国軍では師団が第一から第七まで存在する。

一師団が大体四百人程度だから、半分だと二百人。

その数を一人で相手にしたとなるとかなりのやり手だ。

「しかも賊に倒されたと思われる軍人全員が、賊の姿を見ていないらしい。」

『マスター?』

思わず男たちの会話に聞き入っていたカイルは、ロゼットが自分を呼ぶ声で我に返った。

「あ、…悪い…」

『…? プロキオン支部はこっちですよ。早く行きましょう。』

ロゼットの後ろを歩きながら、カイルは先程の男たちの会話を思い出していた。

（結晶って多分聖象核のことだよな…?）

なんとも言えない不安が頭を過ぎった。

「申請かしら?…えっと…」

「シ…カイル・プレンティスです。」

「プレンティス君ね…」

眼鏡の女性はボードのようなものに何かを書いていた。

「ちなみに出身地は？」

「ミアプラキドスです。孤児院で育ちました。」

「…だからあの地域独特の青い髪なのね…ってことは使える属性は…」

「あ…水じゃなくて火なんです俺。」

女性は意外そうな表情をして、またボードのようなものに書き加えた。

ギルド協会プロキオン支部。

煉瓦造りのかなりでかい建物だった。

ロゼットが言うには本部に次いでの大きさらしい。

入口で待っていると云ったロゼットと別れ、受付をすること十五分。赤い眼鏡をかけた人の良さそうな女性に、ある一室へ案内されたのだ。

「でもミアプラキドスにも支部はあるわよね…どうしてここで申請を？」

「王都の知人を訪ねて来てたんでそのついでに。」

眼鏡の女性は納得したようだ。

まあ、この女性にカイルが話したことはほぼ嘘なのだが。

まず名前は偽名、出身地も勿論違う。

属性は火も使えるが、他の七つの属性も使える。

孤児院で過ごしたことがあるのは事実だ。

しかしそれ以外はでっち上げた設定だった。

これらも昨日の夜、ロゼットと決めたことの一部である。

「：よし、大丈夫そうね：じゃあ私は協会本部に連絡してくるから待っててもらえるかしら？」

「分かりました。」

眼鏡の女性は椅子から立ち上がって部屋から出ていった。

：なんとかあったか：。

カイルは胸をなでおろした。

申請は大丈夫だとロゼットが言っていたが、正直かなり不安だった。

ボロがでたらどうしようかと思って内心冷や汗をかいていたが、無事に終わって良かった。

宿屋に帰ったら魔術を使ってみようか。

というかこのギルドに配属されるんだろうか。

様々な思案を浮かべていたカイルの目の前で部屋のドアが開いた。

入ってきたのは先程まで自分に質問をしていたあの眼鏡の女性だ。

何やら慌てているようだ。

冷静に女性を見ていたカイルは次の言葉で固まった。

「ごめんなさい。私忘れてたわ…認定証明書って今持ってるかしら？」

「認定…証明…書…？」

「そうよ、貰ったでしょう？魔術士認定証明書。魔術士認定試験で合格すると貰える紙…あれの登録番号を教えて欲しいの。本部の人に言われるまで忘れてたわ私…」

「持っていないです…。」

「…王都の知人の方の家に置いてあるのかしら…？それなら待ってもらえると思うけど…」

「認定証明書がないと駄目なんですか？」

女性は不思議そうに首を傾げた。

「…そうね。十年ぐらい前から認定証明書がないとギルドに属することができなくなったのよ。」

（なんでもっと早く目を覚まさなかったんだ俺！！）

カイルはかなり後悔していた。

…今更遅いが。

女性はそんなカイルの様子に気付いた様で

「もしかして魔術士認定試験…受けてないの…！？」

「…はい…」

「おかしいわね、普通魔術士養成校を卒業したら認定試験を受けるのが普通なのに…」

もしかして…

と女性は呟いた。

「カイル君、年はいくつかしら？」

「…（一応）十五ですけど…」

「やっぱり…養成校を卒業するどころか、入学すらしていないのね…。
ギルドもそうだけど魔術が関わってくる仕事は認定証明書がないと
受け入れが出来ないのよ。」

どうやら完全に終わった模様だ。

あとロゼットの所持金でどのくらい生きられるだろうか。

…カイルには花畑で笑うマリアの姿が一瞬見えた気がした。

「あ…ちょっと待ってて。」

女性は再び部屋を出て行った。

しかし、カイルはそのことに気付かず半ば諦めたように溜め息をつく。

自分は死ぬにしても、ロゼットはどうするのだろう。

再び彼女は独りになってしまう。

そんなこんなでカイルが頭を悩ませ始めてから三分後、またまた眼鏡の女性が部屋に入ってきた。

「カイル君、私から提案があるんだけど。」

カイルはその言葉で伏せていた顔を上げた。

「王立レグルス魔術学院入学案内……?」

机の上に置かれたパンフレットの表紙にはそう書かれていた。

「ここから3 kmぐらい離れた所にそれがあるのよ。結構歴史のある学院でね、寮制だから住むところには困らないし。……それにね、貴族の寄付金のおかげで入学金と授業料以外タダなのよ。……どうかしら、この学院に入学しない?」

「でも入学金ってどれくらいかかるんですか?」

「大丈夫。50000ギルトよ。」

それならなんとかなりそうだ。

しかし：

「入学金は大丈夫なんですけど、授業料が多分払えないと思います
：」

この学院はどうやら三年制のようだ。
まさかロゼットの所持金で払える額ではないだろう。

女性はそれでもニコニコと笑っていた。

「それも大丈夫。奨学金制度があって、申請すれば授業料は借金と
いう形になるけど、卒業した後仕事の収入が入るようになってから
返せばいいの。：私もそうだったし。」

こんな上手い話があったいいのだろうか。

夢なのではないかと思い頬をつねってみるが、普通に痛かった。

「何でもここまで俺に親切にしてくれるんですか：？」

「親切：なのかどうか分からないけど：。君が私と同じだったから
っていうのもあるし：」

それにね。

と、彼女は少し照れくさそうに言った。

「君は私が小さい頃から憧れていた英雄に似てるから…」

カイルはこの時初めて自分が英雄扱いされていて良かったと思ったという。

&l t; 10 & g t; 変移（後書き）

途中から主人公の名前が変わりました。これからは”カイル”と表記するので、よろしくお願いします（笑）

ここで第一部は終了で、次からは第二部（またの名を学院入学編）が始まります！

お楽しみに☆

&l t; 1&g t; o v e r t u r e ? (前書き)

この話から第二部に突入です。

&l t; 1 & g t; o v e r t u r e ?

L e m u r i a 2 0 0 1

P r i m a b e r a ? | ? ? c l o u d

窓の外を見れば雲ひとつない青空が広がっていた。

窓を開けると部屋の中に朝の風が入ってきて、カイルの頬を撫でた。

外からは商店街の活気溢れる声が聞こえてくる。

…もしかして寝過ごしてしまったのだろうか。

壁に掛けてある時計を見遣るが別にそこまで遅くはなく、出掛けるまでかなりの時間がある。

ぼんやりと窓の外の景色を眺める。

自分がシリウス・クラインとして生きた時代とそう変わらない王都の街。

最初にここへ来た頃は夢を見ているのではないかと思っていたが、この頬を風が撫でる感触がそうではないと自分に告げていた。

隣のベッドを見れば、そこにいるはずの相棒は既におらず、丁寧に片付けられた寝具だけがそこにはあった。

きつともう宿屋の一階にある食堂に行って、女将さんを手伝っているのだろう。

ホームクルス
造魔は睡眠を必要としない存在だ。

勿論ロゼットも例外ではない。

だから金銭面を考慮して、最初は一人部屋をとることにした。

（受付の際に、宿屋の女将さんには不思議そうな目で見られたが）

だが床の上で過ごさせるのも気が引けて、ギルド協会プロキオン支部から帰った後に二人部屋に移動したのだ。

女将さんは二人で一人部屋を使っていた自分たちを心配してくれていたらしく、その申し出を快く了承してくれ、更に一人部屋の料金で二人部屋を使わせてもらえることになった。

そのお礼として毎朝ロゼットは女将さんの手伝いをしている。

自分も何か手伝おうと思っていたのだが、丁重に断られてしまった。

（おおよそ、ロゼットが何か言ったのだろう）

そもそも最初はこんなに長くこの宿屋に留まるつもりはなかったのだが……。

＊＊

「君は私が小さい頃から憧れていた英雄に似てるから……」

カイルはこの時初めて自分が英雄扱いされていて良かったと思ったという。

しかしホッとするのも束の間だった。

「じゃあ一週間後、入学試験があるから頑張ってね。」

はい……………？

カイルは呆然としていた。

入学試験とはあの入学試験だろうか。

過去、王立学術院の入学の際にそんなようなものを受けた記憶はあるが。

「…ちなみに試験ってどんなことやるんですか…？」

おそるおそる訊いてみた。

すると彼女は少し考えてから、
こう言った。

「毎年、筆記と実技だったと思うけど…。」

実技は何とかなるだろう。

火の魔術をかませばいい。

――早速宿屋に帰ったらやってみるか。

…問題は筆記の方だ。

確かに自分は王立学術院を首席で卒業することが出来た。

でもあくまでそれは二千年前。

二千年経っていれば学問だって進歩しているだろう。

まさかいきなり現代の情勢とかを出されたりしても無理だ。

魔術についての筆記試験だったら、満点を取る自信はあるが、まさかそれだけとは到底思えない。

歴史だとかも当然含まれるだろう。

「まあ筆記試験と言っても、ここ最近の情勢だとか歴史を尋ねてく

るだけだから。心配しなくても大丈夫よ。」

彼女はきつと自分を慰めてくれようとしたのだろうが、逆効果だった。

一難去ってまた一難。

今度は学院に入学できるかどうかが最大の壁となっていた。

こんなに焦ったことはなかっただろう。

試験に落ちれば今度こそ…。

またカイルには花畑にいるマリアの姿が見えた気がした。

「ありがとうございます。えっと…」

そういえば名前を訊いてなかったことを思い出して、視線をさまよわせた。

「…ウエンディ・ボールドウィンよ。カイル・プレンティス君。」

彼女はそう言って微笑んだ。

とりあえず受けるかどうかは王都の知人（ロゼット）と相談してから決めると告げて、失礼することにした。

彼女：ウエンディはカイルと一緒に入口のところまでついてきてくれた。

（何故ならカイルの方向音痴っぷりが発揮され、この建物の中をかなり迷ったからだ。後になってロゼットのマナの気配をたどれば良かったことを思い出したのだが）

「じゃあ改めて：ボールドウィンさん、ありがとうございました。」

「そんなお礼を言われるようなことはしてないわ。：頑張っただね。」

カイルが礼をするとそれに反応してウエンディはにっこりと笑った。

「それじゃあ。」

「気をつけてね。」

カイルがその場から歩き始め、背中を向けても彼女は手を振り続けていた。

しかし、その背中が見えなくなると振っていた手を下ろし、腕を組んだ。

「そんなにこそこそしなくてもいいんじゃないの…トール？」

ウエンディの後ろの柱から背の高い男が姿を現す。

「こそこそなんてしてないぞ。お前があの少年ときよならするのを待ってたんだ。」

「じゃあ堂々とそこにいれば良かったじゃない。…結果なんか張らないで。」

「驚かせたかったんだよ…ま、意味なかったっぽいけどな。」

男は大げさに肩をすくめてみせた。

しかし、すぐに真剣な表情を浮かべてカイルが消えていった方向に視線を移す。

「なあ、ウエンディ。」

「…何かしら？」

ウエンディは珍しく真剣な声色で話す男……トールに少し驚いた。

「あのカイルって少年、本当に十五歳なんだよな…？」

「本人はそう言っていたけど…それがどうかしたの…？」

質問の意図がよく分からない。

水楼の都ミアプラキドスで育ったというあの少年は、海を思わせる髪と左目をしていた。

あの地域ではよく見かける色だったから気にもとめなかったが。

それに使える属性が水ではなく火だということに少々驚きはしたが、特に変わったところは見るとは限らなかった。

…少々世間に疎い点を除いては。

魔術士認定証明書を知らなかったようで、不思議そうにあの時は聞き返していた。

正直言くとウェンディは内心で彼を疑っていた。

だってまさか、ギルドに申請にくるような人物がそれを知らないとは思っていなかったからだ。

まあそれを除いてはどこにでもいる十代の少年だった。

…では一体何故この男は自分にこんなことを訊いてくるのだろうか？

「その様子だと気づいてなかったみてえだな…」

――気付かなかった方が幸せか…

と、その後に小さく呟いたのだがウェンディには聞こえてなかった様で、彼女は不思議そうにこちらを見ている。

暫くの後、トールは小さく笑って

「…やっぱり何でもねーわ。」

と言い、ウェンディに背を向けた。

「は…？何でもないって…ちょっと待ちなさいよ…」

後ろからウェンディの声が聞こえてくるが構わず彼は歩き続けている。

いや、そうしないと思考が止まってしまいそうだったからか。

ローウェンディはカイルというあの少年のことを特に気にしていなかったが…

「ありゃあかなりの化けもんだな…」

プロキオン支部に立ち寄ったついでに、ウェンディに会っておこうと思ったのがそもそもの始まりだ。

ただでさえ広いこの建物（本部はこの二倍以上の広さだが）の中で一人の人物を探すのはかなりきつい。

古代…二千年前くらいは一人一人のマナの気配をたどることが出来たというのを聞いたことがあるが、

ツールは何故それが出来なくなったのだろうかと少し（いやかなり）昔の人間を恨んだ。

現代の魔術は、魔術が最も盛んだった二千年前と比べるとかなり劣化しているらしい。

劣化の原因は様々な理由が挙げられているが、ラグナロク世界終焉が阻止されたせい（おかげ）で世界が平和になり、生物が魔術を使わなくても生きていけたからではないかと彼自身は思っていた。

使わないモノが廃れていくのは自然の摂理。

そう諦めて受け入れるしかないのだろう。

そんなこんなでトールがウエンディを探し始めてから三十分。
目的の彼女は入口にいた。

：どうやら誰かと話している。

そのお相手は海を思わせる髪と左目、右目に黒い眼帯をつけた十代
そこの少年だった。

トールの顔に意地の悪い笑みが浮かぶ。

：そう、この時は観察程度に考えていたのだ。

幸い二人は自分に気づいていない。

トールは自分のまわりに結界術をかけるとウエンディ達の方に近づ

いていった。

ウェンディの後ろにある柱のところで足を止める。

「じゃあ学院の件は王都の知人と相談してから決めます。」

「まあそんなに簡単に決めていいことじゃないけど…入学試験は一週間後だからなるべく早く決めたほうがいいわね。」

少年は苦笑を浮かべた。

…というかどこかで見たことあるような…

「ありがとうございます。…えっと…」

少年はウェンディの名前を知らなかったのだろう。

視線をさまよわせている。

「ウェンディ・ボールドウィンよ。カイル・プレンティス君。」

ウェンディは微笑んだ。

その時だ。

この世のものとは思えない鋭い殺気がツールを襲った。

足が震える。

何もかも見透かされているようなこの感じ……。

ウエンディではない。

彼女はこんなおどましい殺気を放たないし、放てないだろう。

（じゃあ一体誰が……！？）

自分をここまで怯えさせる殺気を放つ人物は一体誰なのだろうか。

さまよっていた視線がウエンディと話している少年でとまった。

彼は人の良さそうな笑みを浮かべている。

（まさか……？）

一瞬戸惑ったトールだったが、それは確信へと変わった。

少年が自分の方へ一瞬顔を向けたからだ。

表情には人の良さそうな笑みが張り付いているが、

瞳の奥には百戦錬磨の戦士のような光が宿っていた。

気付けば背中から冷や汗が流れていた。

頭の中で警鐘が鳴っているような気がする。

――コイツと関わってはいけないと…。

それから後はあの少年が去るまで立ち尽くしたままだった…。

「とんでもねえのが世の中にはいるもんだ…」

あの感覚を思い出すだけで足がまだ震える。

「カイル・プレンティスか…」

勿論、ウェンディと別れたカイルはこのことを知る由もなかった…。

＊＊

まあそんなわけでウエンディと別れたカイルはロゼットと合流し、学院のことを話した。

内心反対されるのではと少し心配していたのだが、彼女はそんな心配もよそにすぐ首を縦に降ってくれ、カイルは入学試験の勉強のためにここに留まっているという訳である。

…ちなみにその日の夜、王都周辺の森で大火事があったとか。

身支度を整え食堂へ行くとエプロン姿のロゼットがそこにいた。

『おはようございます。』

「…おはようロゼット…。で、一体何してたんだ…？」

『朝食づくりです。』

いやそんな真剣な顔で答えられても。

どうしても机の上にある物体に目が行ってしまつて、カイルの口からそのツツコミが発せられることはなかったのだが。

女将さんも若干笑みがひきつっていた。

…この机の上にある物体を見れば誰でもそうなるだろう。

「ロゼット…これは…？」

『朝食です。』

「そうじゃなくて…これは何なんだ…？」

ロゼットは質問の意味を理解したのか、笑みをうかべた。

『ビーフシチューです。』

…まず一つ。ビーフシチューは決してこんな毒々しい紫色はしていない。

そしてもう一つ。普通シチューの中（他の料理も勿論だが）にうにのようにと動く物体は入っていない。

（不覚だった……）

この可愛らしい造魔にも弱点があった。

：言わずもがな料理である。

味覚が無いせいなのか未だに原因不明だが、彼女がつくる料理は良く言えば独創的。悪く言えば（いや言わなくても）食べられないものだった。

しかも本人は無自覚なので質が悪い。

『好きでしたよね…？』

ビーフシチューは好きだ。

ただし食べられるもの限定で。

（正しくは食べても平気そうなものだが）

カイルは悩みまくっていた。
それはもうまわりの声が聞こえない程に。

ここでこのビーフシチュー（という名の毒物）を食べたら間違いなく今日の入学試験に行けなくなる。

かといって、折角つくってくれたのを無下に扱うのは心苦しい。

『食べないんですか…？』

…決断の時は迫っていた。

「よし、ロゼット行くぞ。」

『はい、マスター。』

なんとかあの場で生き残ることが出来たカイルは、隣にいるロゼットに声をかけた。

（結局、あまり調子が良くないと言って女将さんに食パンとサラダをもらった）

今日は入学試験の日。

そしてこれから始まる波乱の日々の幕開けでもあった……

&l t;1&g t;o v e r t u r e? (後書き)

学院に舞台がまだ移っていませんが一旦ここで切ります。
これからもこんな駄文ですが、よろしくお願いいたします。

&l t; 2 & g t; o v e r t u r e ?

王立レグルス魔術学院。創立千三百年の歴史を誇る由緒正しき魔術士養成校だ。

三年制で、生徒は全部で二千人以上。

王都から近いせいか、貴族からの寄付金が多い。

そのおかげで生徒は入学金と授業料を払えばいいだけ。

他の学院生活でかかる費用を出す必要がない。

こんなことも手伝ってか、王立レグルス魔術学院は世界に四つある魔術士養成校の中でも、一番入学希望者が多いと言われている。

とにかくでかい。

カイルが”ソレ”を見た時最初にそう思った。

ウェンディ・ボールドウィンと名乗る女性に入学案内のパンフレットを貰っていたので、かなりでかいというのは分かっていったが。

座学（魔術理論等）の授業を行う講義棟、実技（魔術訓練等）行う訓練場。

二年に一回開かれる闘技大会などに使われるアリーナ。

生徒が暮らす寮など様々な建物がある。

二千年前は学校といえば王立学術院か、士官学校だった。

（カイルはその両方を卒業した）

少なくとも二千年前はこんな立派な施設などはなかったため、このあたりは進歩したと言っているだろう。

入学試験が行われるのは筆記が講義棟、実技が訓練場だ。

「俺は七階だったけ…」

受験が決まった後申し込みをしに一回ここへ来たので、エンゼルカッツェ翼猫となつて自分の肩に乗っているロゼットほどは驚いていなかった。

人間に実体化している時とは違い表情は分かりにくいが、アメジストの瞳をきよきよらせているので多分そうだろう。

本当は宿屋で待っていてもらうつもりだったのだが、何故かどうし

てもと言うのでその勢いに負け、翼猫に実体化するという条件でついてくることになった。

『マスター…そっちは講義棟じゃないですよ…』

いつのまにやら違う方へ来てしまったらしい。

ロゼットが自分が読んでいたパンフレットの地図を見てため息をついた。

（猫がため息をつけるかどうかはこの際気にしない）

今この瞬間ついてきてもらって正解だったとカイルは思った。

マナの気配で人や物を探す癖があるので、どうしても迷いやすい。この前のプロキオン支部がいい例だ。

カイルは小さくため息をつく。

きつと入学しても慣れるまではかなり迷うのだろう。

そう思いながら講義棟へ向かうために来た道へ踵を返した。

「受験番号980…カイル・プレンティス君ね。七階へどうぞ。」

受付の女性がにっこり笑う。

名簿らしきものの最後の欄に赤いチェックがされた。

どうやら自分が一番数字が大きい受験番号のようだ。

「あのすいません…」

「どうかしたの…?」

「ロ…コイツってどうすればいいですかね…?」

肩の上にいる灰色の毛に白い翼、アメジストの瞳をした翼猫…ロゼットを見て困ったように笑った。

「この翼猫…君が…?」

「はい。…昔怪我したところを手当したら妙に懐いちゃって…」

女性は固まっていた。

何か変なこと言っただろうか。

不安が押し寄せてくるのを感じた。

「えっと…」

「すごいわ、なんて可愛いの!!」

「はい…?」

思わず間拔けな声がでた。

女性の水色の瞳がキラキラと輝いている。

肩の上にいるロゼットは何かを察知したのか、物凄く嫌そうな表情になっていた。

「翼猫と言えば超希少種じゃない!! しかも噂以上に可愛い! ねえ名前はあるの!？」

”あなた誰ですか?”と聞きたくなるくらい女性は豹変していた。

「ロ、ロゼットです・・・」

黒騎士の異名で恐れられていたカイルは、今現在この女性のほうが自分よりよっぽど恐ろしいと思っていた。

全く違う意味でだが。

この勢いの前では何をやっても無駄な気がして、彼女に触られまく

ってるロゼットに同情しながらもあえて何も言わないようにしていた。

…恨みがましそうにロゼットが自分を見ていることには気づかないフリをして。

「試験に連れて行くわけにもいかないでしょう？ 私が構っ…預かっていてあげるわ！」

何か言いかけていたような気がするがこの際スルーだ。

言及しない方が身の為だと判断したカイルは礼を述べ、講義棟の中へと入っていく。

…その後ろ姿を恨みがましそうに見る翼猫がいたとかいなかったとか。

問1.

魔術発動における三大過程を提唱したのは誰か。

問2.

魔術の中の一つ攻撃術で、属性の数とそれぞれの名称を答えよ。

ここらへんは誰でも解けるだろう。

問19.

近年ミアプラキドスの北西に出来た新興都市の名を答えよ。

これはパスだ。

問26.

治癒術を扱う者のことを一般的に何と呼ぶか。

カイルはざっと問題に目を通していた。

筆記試験が始まってまだ五分とたっていない。

結構解けそうな問題ばかりだったので安心した。

制限時間は残り五十七分。

かなり余裕がある。

問99.

創世の時代に使用されていたアルト文字で書かれた次の文章を訳し、その文の質問にアルト文字で答えよ。

q w a p x c w e a p t y e r p a i o n m
s d < g f z x m n x c m n ?

どうやらこれが最後の問題のようだ。

(全部で九十九問か：配点は一問一点：)

最後のこの問題だけは配点が二点のようだった。

(別に特別難しい問題ってわけじゃなさそうだが：)

アルト文字とはアルカディアが創世暦の頃使用されていた文字だ。

規則性があり分かりやすい文字で、確か王立学術院に入ってから二年目に入ってすぐの頃習った気がする。

現在残り四十分。

現代の情勢やら地理やらの問題を全てとばし、最後の問題を解き終わったカイルは、暇そうに窓の外を眺めていた。

もし今ここにあの（今頃はあの受付の女性に構われているだろう）相棒がいるとすれば、まだ埋まって無い箇所を見て

『最後まで諦めないでください』

とかなんとか言いそうだが、生憎その本人（？）は現在ここにはいないため、彼を咎める者は誰もいなかった。

窓の横の席だったし、カンニングしているとは思われなかったようで試験官らしき男は何も言っていない。

：つまり考え事をしながらぼーっとすることが出来る環境だった訳だ。

（そういえば：プロキオン支部で俺とボールドウィンさんを見てた男…）

カイルの頭に浮かんできたのは、一週間前プロキオン支部で殺氣を向けた男のことだった。

結界を張ってこちらに近付いて来ているのには気付いていたが、敢えて何も言わずに放っておいた。

しかし、ウェンディの真後ろの柱で足を止めた男に殺気を放ってしまったのだ。

反射的にやってしまったことだし、相手の足も震えていたのでそのままにしておいてしまったが…。

（一応謝った方が良かったか…）

今更なのは分かっているが。

どうやら自分が帰る直前に彼女も気付いたらしく、少し柱を気にしていた。

彼女の知り合いだったようだ。

危害を加えようとしていない相手に殺気を放ったのは悪かったと思うので少し気にしていた。

（結界内を見せなくしてたから結構な魔術士か…）

結界術は術者がかけた結界の範囲内をあらゆる対象から守るものであり、術者の魔力によって効果は異なる。

魔力が少ない者が術を使うと、狭い範囲で結界を張れる時間も短い。逆に魔力が多い者が術を使うと範囲も自由にコントロールが出来る、

効果が続く時間も長く、結界内の物を見えなくすることが出来るのだ。

現代では魔術が劣化しているというが、彼はなかなかの使い手だと思う。

その証拠に結界術に結構な自身があったらしいあの男は、自分に見破られた時かなり驚いていた。

自分の正体は分かっているだろうが、もしかしたら目を付けられたかもしれないと心配していたのだが：どうやら大丈夫なようだ。

まあその心配は既に現実のものとなっているのだが、カイルはまだそれを知らない…。

筆記試験終了後、実技試験を受ける為カイルは第一訓練場にいた。自分が最後の受験番号の為、かなり待つことになっている。

入学試験は筆記と実技が5…5で評価されるらしく、筆記がある程度取れていれば実技でかなり馬鹿をやらない限り毎年合格が確実とされているらしいのだが…。

何故か今年は特殊だったらしい。

毎年募集定員の10%オーバーくらいの数の入学希望者がいるのだが、今年は募集定員の七百名に対し九百八十人。つまり40%オーバーになってしまったわけだ。

そんな訳で第一訓練場は受験生達（一部除く）の緊張感に包まれていた。

「受験番号979：レオンハルト・ファーガス君ね。はい、実技はこれで終了よ。」

「ありがとうございます。」

どうやら自分の番が来るらしい。

カイルは訓練場の中央へ向かう。

自分に向けられる視線が痛かったが、そんなことには慣れていたので無視を決め込んだ。

「受験番号980：カイル・プレンティス君ね。今まで見てたから

分かると思うけど、あの人形に向けて魔術を使ってもらいます。使う魔術は何でもいいけど…」

「攻撃術でいいです。一番得意なんで。」

「じゃあそういうことで。早速始めましょうか。」

＊＊

プロキオン支部から帰った後、カイルとロゼットは王都の近くにある人気の無い森へ来ていた。

『あまり強力なのは使わないでくださいね。…後が大変なので。』

「分かってるって。そんなに強力なのは使わないから。」

カイルがそう言ってもロゼットが疑わしげな表情を崩すことはなかった。

『貴方はただでさえ魔力が多いんです。貴方が下手したら苦勞するのは私なんですから…。』

——まだ目覚めてから一度も魔術を使っていなかったの、試験もあることだし折角だから火の魔術を使ってみよう——

と、思ってきたのがこの森だ。

流石に街中で使うのは不味い。

それならばとロゼットがここを提案した。

「何使うか…？」

『メテオクラッシュとかは止めてくださいね。…私対処できる自信がないですから。』

「あんな魔術今使うわけないだろ。」

メテオクラッシュ…火属性の魔術の中でもかなり上級の攻撃術だ。今使ったら火事どころではなくなる。

「…あれにするか…」

カイルは自身の足元に赤い術式陣を展開させる。

火属性の魔術を使う合図だ。

魔術を使う時、術者の足元には普通”術式陣”と呼ばれるものが展開される。

これによって三大過程が構築される三つの体内機能が動き、魔術を発動させることが出来るのだ。

ちなみに術式陣の色は発動する魔術の属性によって違う。

光は白、水は青、火は赤、風は緑、地は茶、氷は紫、雷は黄、闇は黒。

というふうに。

「獰猛なる火竜、威嚇の一撃を放て」

三大過程の際には詠唱が必要だ。

マナを変換させる暗号のようなもので、これをやらないと魔術が発動されない。

『ちょっと、マスター!?!』

嫌な予感がしたロゼットは一応止めてみるが、もう遅かったようで。

「ドラゴンブレス!」

赤い大きな火球が一本の木に命中した……。

…その後どうなったかはご想像にお任せする。

＊＊

…というわけで、カイルには平穩に過ごしたいという強い願望があったため、この実技試験は目立たないように合格する必要があった。

（ここは下級魔術のファイアボールで乗り切るか…）

ファイアボールは火の魔術の基本中の下級魔術。

自分より前の受験生も使っていたし、これなら問題ないだろう。

カイルは意識を集中させ、足元に赤い術式陣を展開させる。

（あの人形を焦がすくらいで充分だから……）

自分がこのままファイアボールを使ったら火事以上のことになってしまう。

（まあ眼帯外したらもっと凄いことになるのだが）

マナが自分の中に吸収されていく感覚。

「紅焰、転回せよ。」

少し違和感を覚えた。

…何だか嫌な予感がする。

「ファイアボール！」

放たれた小さい二つの火球はカイルの5 m前にある人形に激突する。

…ここまでは良かった。

あろうことか火球は、一つは人形を一瞬で消し炭にし、もうひとつはものすごいスピードで直進して訓練場の領域から消えていった。

きっと結界を張っていたのだろう。

火球が訓練場を突破する時、ガラスの割れるような大きな音がした。

もしかしなくても結界を破ってしまったのだ。

（やりすぎたか……）

受験生達に注目されている。

カイルは疲れたように長いため息をついた。

もし彼の相棒がいたら

『だから気を付けて下さいって言ったんです。』

と彼と同じくため息をつきながらそう言っていただろうが。

同時刻、特別棟二階・生徒会室――

「学院長の張った結界をファイアボールで破るなんて……」

窓のそばから聞こえるのは女の声だ。その声色には驚嘆が滲み出ている。

彼女は窓を開けるとその身を乗り出した。

菖蒲色のセミロングの髪が風に吹かれて揺れている。

「一体…何者なのかしら…」

視線の先には項垂れた様子の海を思わせる青い髪と左目に、右目に黒い眼帯をつけた少年…
カイル・プレンティスがいた。

「…面白いことになりそうね…」

彼女のエメラルドグリーン瞳が妖しく光った。

&l t;2&g t;o v e r t u r e ? (後書き)

楽しんでいただけたでしょうか？

ご感想、ご質問など待ってまゝです♪

&l t.; 3 & g t.; s o t t o v o c e ? (前書き)

シリアスなんだかギャグなんだかよくわからない話です。

&l t; 3 & g t; s o t t o v o c e ?

… 雷が鳴っている。

最初に目に入ったのは生温かい赤い物…。

赤い絨毯の上に転がっているのは透明なグラスだ。中身が溢れて絨毯に染みを作っている。

「マリア殿下…？」

声が震える。

雨の降る音と雷鳴しか聞こえない。

信じられない。…信じたくない。

まさか…

「殿下！？」

彼女が…

＊＊

『マスター…？』

目を開けると、ロゼットが心配そうに自分を見ているのが分かった。

『かなり魘されてましたけど…大丈夫ですか？』

どうやら少し汗をかいたらしい。

『またあの夢を…？』

カイルはそれに答えず、苦笑するだけだった。

「…なんか寝坊したみたいだな。あまり時間もないことだし、荷物の整理しといてくれないか？」

『…分かりました。』

そう答えるロゼットの瞳はどこか悲しげだった。

彼女は目を伏せると小さくため息をする。

背後から扉が開く音がした。

きつとカイルが着替えにバスルームへ行ったのだろう。

『二千年経っても…まだ貴方はあの日を忘れられないんですね…』

部屋には時計の針が動く音だけが響いていた…。

五日前めでたく入学試験に合格が分かったカイルは、早速学院の寮に移ることとなった。

このまま入学式を待ってここにいるわけにもいかない。

金銭の問題もあるし、何より女将さんにこれ以上迷惑をかける訳にもいかないからだ。

構わないからと言っていたがそろそろ潮時だろう。

合格発表の際に貰ったセピア色の制服に袖を通す。

ネクタイは学年ごとに色が違らしく、今年の色は緑だ。

ブレザーというものは初めて着たが、堅苦しい感じがしてあまりカイルは好きにはなれそうになかった。

…それを言ったら軍服だってそうなのだが。

そこはスルーの方向で。

とにかく準備を終えたカイルとロゼットはお世話になった女将さんに挨拶をし、宿屋をあとにした。

『そういえばマスター』

ロゼットが何か思い出したようにそう言った。

「? どうした」

ちなみにカイルは本日二回目の食事の真っ最中。

彼は唐揚げに手を伸ばしていた。

『試験どうだったんですか？筆記のことは聞きましたけど、実技のことは聞いていなかったの。』

ロゼットの後ろから黒いものが見えるのは気のせいではないだろう。

笑っているはずなのに、何故か彼女は地獄の魔王のごとく恐ろしかった。

それを見てカイルは唐揚げに伸ばしていた手を慌てて引っ込める。

「あゝ…実技？…別に普通だったけど…」

合格しているから別に問題はないのだが、彼にとっては少々不味い。

本当のことを言ったら彼女にお説教（一時間正座のフルコース）をくらうことは間違いないだろう。

あの時置いて行かれた（生贄にされた）ことを根に持ってるらしく、最近不機嫌だ。

ただでさえ不機嫌なのに、これで本当のことを話したら彼女は鬼と化すだろう。

”女は強し”だ。

（だが実際はロゼットに明確な性別はない）

『私はどっかの誰かさんに置いていかれたので、”普通だった”では無くもうちょつと詳しく話して頂きたいんですが。』

彼女はかなり怒っている。

冷静沈着という言葉が似合う彼女にすればかなりだ。

そこまで嫌だったのだろうか？

そんな疑問を浮かべるカイルだったが、彼は自身があの場合を離れた後何が起こったかを知らない。

ロゼット曰く、”もう会いたくない”という目に合わされたりしたが、あまり話に関係ないので割愛。

「詳しくって言われても…。ただ普通にファイアボールを人形に向けて使っただけで…」

嘘は言っていない。実際にカイル本人は普通にファイアボールを使っただけだ。

…変なことは言っていないはずなのにどうしてだろうか。

ロゼットの笑顔が晴れやか（真っ黒に）なった。

物凄い嫌な予感がして、カイルは表情が引きつっていた。

『結果を破って壊すファイアボールは普通なんですね。私、初めて知りました。』

どうやら彼女は既に知っていたらしい。

カイルの淡い願いも消え去り、彼は肩を落としている。

『覚悟はいいですね？』

その後、”シルバーホワイトの髪的美少女が正座をしている青髪的美少年に一時間ほど説教をしていた”と客に飲食店の定員が話していたというが、真偽は不明である。

午後三時 王立レグルス魔術学院・男子寮四階

「221ってここだよな…?」

白い扉の真ん中に金色の文字のナンバープレートが貼ってある。
その前で小さな紙を左手に持ち、立っている少年がいた。

海を思わせる青い髪の少年、カイルである。

彼の肩には翼猫に実体化したロゼットがいた。
エンゼルカッツェ

流石に人間に実体化したままでは男子寮はおろか、学院内にいることも難しい。

彼女は学院関係者でもなければ生徒でもないから当然と言えば当然だ。

それなら翼猫に実体化すればいいとロゼットが提案したが、もしかしたらペット(?)も持ち込み禁止なのかもしれないと思い、寮監

の先生に尋ねてみたところ。

”相部屋になった生徒が駄目と言わなければ大丈夫”

と言われたので、基本的にはOKらしい。

後は相部屋になる生徒次第だ。

寮と言っても無制限に部屋がある訳ではないので、1・2年は二人で一部屋、3年のみ一人一部屋らしい。

勿論カイルも例に漏れず、二人で一部屋だった。

先程から自分とルームメイトになるのはどのような人物なのだろうと考えていて、いざ扉を開く時になると柄にもなく緊張してしまう。

自分と同じ年齢の少年…。

考えてみれば自分の周りの同性はいつも年上ばかりだった。

それは年幼くしてカイルが軍人になったことも関係しているが、

自分が色々な意味で異端だったせいもあって同年代の少年達からは避けられていたからである。

異性にはマリア王女やその異母妹のウイステリア王女がいたのだが。

もし自分のルームメイトになった人物がロゼットがいることを良しとしなかったら、彼女はどのようなのだろうか。

そうすると彼女は自分の前から消えてしまふんじゃないだろうか。

そういったなんとも言えない不安がカイルの胸に押し寄せてきて、それらが彼に扉を開けさせることを拒ませていた。

『…マスター？』

その声で我に返ったカイルは、何かを振り払うように首を振ると金の取っ手を掴む。

そして静かにそれを引いた…。

青が目立つ部屋だった。

かなり豪華なつくりというのは入ってすぐに分かったが、いくら何でもこれはどうかと思う。

余程貴族というのは金があるのだろうか。

自分のルームメイトとなる人物はまだこの部屋にはいないようだ。

カイルはほっとしたように胸を撫で下ろした。

それからソファーにあまり多くはない荷物を置き、奥の窓の方へ向かった。

窓を開けると風が入り込んでくる。

「なあロゼット」

『…何ですか？』

彼女はアメジストの瞳をこちらに向けてそう言った。

その声色はひどく穏やかで。

きっと自分が何を聞こうとしてるか彼女はお見通しなのだ。

カイルは、翼猫と話している自分は傍から見れば相当変だろうと違うことを考えて小さく笑った。

「もし：ルームメイトの人がおまえがいることを良しとしなかったら：どうするつもりなんだ？」

そうすると彼女は悪戯っぽく笑ってこう言った。

『考えますよ：その時になったら。』

悪戯っぽく笑っているマリアの顔がカイルの頭に浮かんだ。

驚いている様子のカイルに不敵な笑みを浮かべ穏やかな口調で彼女は話し始める。

『だってそうでしょう？今からそんなこと考えたって、どうしようもないじゃないですか。マリア様の仰っていた通りです。その時がきたら考えればいいんですよ。』

——「そんなこと今から考えたって何かが変わるわけじゃないでしょう？それなら私はそれを忘れられるほど笑って貴方と過ごしたいの」——

遠い日の彼女の言葉が頭を過ぎった。

強い女性だった。

もう自分は長くないと知りながら、彼女は笑ってこう言ったのだ。

「…そうだよな。俺らしくない。駄目だった時に考えればいいんだよな。」

『それでいいですよ。』

ロゼットは満足そうにそう言った。

もしかしたら一緒に過ごせなくなるかもしれないけれど、何か別の方法もあるかもしれないし。

ここは前向きに考えよう。

「…それに…もしかしたらルームメイトの人がこの前の受付の人みたいかもしれないしな。」

彼女の灰色の毛が逆立った。

『嫌なこと言わないでくださいよ…。』

やはり相当嫌だったらしい。

その時だった。

「よっ、おまえが俺とルームメイトの人か」

後ろから声がしたのは。

金糸雀の髪に浅葱色の瞳をした少年は笑ってそう言った。

背は自分より高いかもしれない。

「それにしても…誰かと話してなかったか？…声がしてたんだけど」
ドキッとした。

まさか外に漏れていたのか。

「俺の他には人は居なかったから気のせいだと思うが。」

「…そうか？…隣の部屋から聞こえたのかもな…」

納得してくれたようでカイルは密かに胸をなで下ろした。

「ところで君は…？」

金髪の少年は思い出したようにポンと手を叩いた。

「そういや自己紹介がまだだったな…。俺はレオンハルト、レオンハルト・ファーガス。長ったらしい名前だからレオって呼んでくれ。」

「俺は…」

「おまえのことは知ってる。カイル・プレンティス…だろ？」

何故彼が自分の名前を知っているのだろうか。

名前を教えた覚えは無いし、そもそも彼とは初対面だ。

カイルが不思議そうに首を傾げると金髪の少年…レオは笑った。

「入学試験のことで結構有名になってるぜ。」学院長の張った結果をファイアボールで壊した”って。」

カイルは自分の顔が青ざめていくのが分かった。

「もしかして相当怒っているとか…？」

あれだけ大きな結界を張るのは現代の魔術士では大変だったに違いない。

それを壊してしまったのだ。怒るのも当然だろう。

大変なことをしてしまった…

カイルはガックリと肩を落とした。

あの時は注目される存在になってしまったことだけに気落ちしていたが…

泣きっ面に蜂とはこのことだろう。

「おまえって面白いな！」

何が可笑しいのか、レオはかなり爆笑していた。

「…は？」

「学院長はむしろ”優秀な生徒ね”っておまえのこと褒めてたらしいぞ。それに悪い意味で有名になってるんじゃないくて、みんなの間でいい意味で有名になってるんだよ。」

極端に力がある者は異端視され、避けられる。

カイルが知る世界はそうだった。

もしかして今はそうじゃないのだろうか？

「普通誰だって凄いのと思うぞ。俺だって見たときはかなり驚いたし、
凄い奴なんだって思ったしな。」

太陽のように輝くその笑顔を見れば、嘘などついていないことが分かる。

「そうだったのか…」

カイルは小さく笑った。

「俺はカイル・プレンティス。カイルと呼んでくれてかまわない。」

改めて自己紹介をしたカイルにレオはまた笑った。

「何かあれだよな…なんか軍人みたいだ。」

何気に鋭い。

しかしこの話し方は癖だ。緊張するとロゼットの前以外だと自然とこうなってしまう。

「軍人ではない。俺はミアプラキドス出身だしな」

「だから髪が青いのか…」

レオは納得したように手を叩く。

それから思い出したように

あ、と言葉を漏らした。

「そういえばさっきから聞こうと思ってたんだ。」

カイルが首を傾げると、レオは真剣な表情になって彼の方を向いた。

「おまえって…」

カイルは思わず空唾を飲んだ。

無意識のうちに変なことを言ってしまったのだろうか？

「シリウス・クラインのファンなのか？」

「……………はあ？」

何が悲しゅうて自分自身のファンにならなければならないのか。

……阿呆らしい。

「え、違うのか？そんなところに眼帯つけてるし、顔もかなり似てるから俺と同じだと思ったのに。」

残念そうにレオはため息をついた。

眼帯は理由になるかもしれないが、顔は不可抗力だ。（本人だし）

……というか今さりげなく、凄いこと言っていた気がするのだが。

「なあレオ…」

遠慮なく愛称で呼んでみた。

「なんだよ？」

「君は……その…シリウス・クライン…のファン…なのか…？」

その言葉にひどく驚いたようで、レオは目を見開いていた。

「当然だろ！？むしろおまえを疑うよ…」

その言葉をそっくりそのまま返したかった。

「だってあの英雄だぞ？俺達と同じ年なのに世界を救うだなんて偉業成し遂げた奴だ、普通憧れたりするだろ！？」

駄目だコイツ。

カイルは小さく肩を落とした。

それから十五分、彼の英雄トークは続いたらしい。

これがカイルと後に親友となるレオンハルト・ファークスとの出会
いだった。

&l t; 3 & g t; s o t t o v o c e ? (後書き)

主要人物やつと登場させることができました。
サブタイトルはあんまり気にしないでください。
それではまた次回で！

&l t;4&g t;s o t t o v o c e ?

暗い空間に靴の音が響いた。

『待っていたよ…μ……』

その声は歓喜に満ちている。

『はい、我が主。』

男は恭しく臣下の礼をとってそう返した。

『あの子の様子はどうかだった？…ボクからのプレゼント…喜んでくれた？』

『勿論です。主に創られた我々と違って…二千年ぶりの”器”ですから…。』

”主”と呼ばれたモノが、嬉しそうに笑った。

『これで目覚めたのはボクを入れて四つだね…。まだ楔に縛られている状態だけど…』

背筋の凍るような妖しい笑みが口元に浮かんだ。

（さて…ボクも準備を始めようかな…）

＊ ＊

レオンハルト・ファーガス。

金糸雀色の髪に浅葱色の瞳の少年。

一昨日出会ったばかりだが、カイルは既に彼が今まで見てきた同年代の少年達とは違うことが分かっていた。

気さくな性格。太陽のような笑顔。

顔もかなり整っていて、女性が彼のその笑顔を見たら、ほんのり紅く染めるに違いないだろう。

（そのことをロゼットに言ったら、何とも言えない目で見られた）

決して上品な話し方をする訳ではない。

（だがそれは今まで軍人をやっていた自分がそう感じるだけであって、一般的に見れば普通なのだろうが）

しかし彼の雰囲気はどことなく上流階級のそれと似ている。

もしかしたら貴族なのかも知れないが、本人が何も言わないのに言及するのは気が進まなかったので、取り敢えず触れないようにしていた。

だがこの世に完璧な存在などありはしない。

言い換えれば”綺麗な薔薇には棘がある”（少し違う気もするが）。

その容姿を見ただけで非の打ち所がない美少年に思えてしまう彼…

レオンハルトにも、難点があった。

……それは彼がひどく”英雄”を崇めていることである。

彼の言うところの”英雄” 本人であるカイルにとっては彼の英雄トークを聞くのは苦痛以外の何物でもない。

自分の（かなり脚色された）伝説を喜んで聞く人物が何処にいるのだろうか。

ロゼットもそんなカイルの心境を悟ったのか、生暖かい目で熱心に語るレオを見ていた。

この二日間、彼の英雄トークを聞く度に心労が絶えないカイルは、なるべくそれを聞かないで済むよう、レオが熱く語り出す前に話を変えようと努めていたのである。

しかしそんな難点があっても、レオは自分を避けようとしなない（むしろ彼は好意的に接してきてくれた）初めての同年代の少年だったので、何だかんだ言っても彼を好ましく思っていた。

——「…公爵子息？」

そう、その話を聞いたのはお昼時だったか。

カイルとレオ、それにロゼットは男子寮の一階にある食堂に昼食をとりに来ていた。

何故入学式もやっていない筈の学院の食堂がやっているのか不思議に思ったカイルだが、その時はかなり空腹状態だったので、その疑問は食後にレオに聞いてみることにして料理を注文した。

（今更だが、ロゼットの件はあっさりと了承され、彼女は寮にいられることになった）

カイルが注文したのはビーフシチュー。
昔からの好物だ。

テーブルについてそれを口に運ぼうとした時だった。

「あのさ…」

珍しく、何となく言いにくそうにレオが口を開いた。

丁度向かい側に座っていたので、カイルには彼の顔がよく見える。
その表情は少しばかり曇っていた。

「どうかしたのか？」

もしかしたら真剣な話かもしれないので、口に運ぼうとしていたシチューがのったスプーンを皿に置いて、改めてレオの顔を見た。

「どうしたって訳じゃないんだけど……。カイルに話しておきたいことがあって…。」

「俺に話しておきたいこと…?」
一体なんだろうか。

「実は俺…」

レオはそこで言葉を切って、それから後の言葉を言おうか決めかねてるようだった。

少しの沈黙の後に彼は再び口を開いた。

「実は俺…公爵家の息子なんだ…。」

「…公爵子息？」

成る程。確かに上流階級の雰囲気がするとは思っていたが。

（まさか公爵子息だったとはな…）

この世界において爵位というのは軍人にのみ与えられる。

下から男爵、子爵、伯爵、侯爵、公爵の順だ。

爵位を与えられることは大変名誉なことらしく、軍上層部の人間は
かなりそれを欲していた。

公爵ともなれば貴族と同等以上。

しかしあまり地位だとかに興味がなかった自分には爵位は（失礼かもしれないが）単なるお飾りにしか思えなかった。

もしかしたら現代では爵位というのは重要になっているのかもしれないが。

しかし、もしそうだとしてもカイルはレオへの態度を変えるつもりは全くなかった。

「……失礼な言い方かもしれないが、それが君本人と関係があるのか？ 君が公爵子息だからと言われても俺は態度を変えるつもりはないし……？」

最後が疑問系になったのは、レオが笑っていたからだ。

さっきまで曇っていた表情はいつの間にかいつもの笑顔になっている。

「おまえが初めてだよ、そんなこと言ったの。」

なんだか嬉しそうだ。

「大抵のやつはこのこと言う態度がかなり変わるんだよね。なんか無駄にヘコヘコしちゃってさ、やりにくくって……」

その気持ちは分かる気がした。

軍での自分はその年齢では不相応な階級の高さだったが、大体の人間はそれを聞く前と、聞いた後ではがらりと態度が変わっている。その時は何とも言えないやりにくさを感じていたものだ。

きつと彼もそうだったのだろう。

だがここでレオに”自分も同じだった”などと言えば、好奇心旺盛な彼は深追求してくるだろうということがと予想ができたので、敢えてその台詞は言わなかった。

「やっぱおもしれーなカイルは。一緒にいても飽きないし…」

「俺が面白い……？」

そんなことを言われたのは生まれて初めてだ。

「ああ、そういう天然なことかな。」

誉められているのだとは思うが…

何だか複雑な気分だ。

「そういう君も充分面白いと思うが…」

「それは良く言われる。」

そう言うトレオは照れくさそうに笑った。

お昼過ぎからは明日の入学式があるため、段々と寮も人が増えてきていた。

「カイル、探険に行かないか？」

レオからそう提案されたのは午後2時過ぎのこと。

ソファアーに座って紅茶を飲んでいたカイルは、後ろにいるレオがそう言ったのでそちらに顔を向けた。

「探険……？」

「そうそう探険！」

笑顔を輝かせるレオだったが、反対にカイルはいまいち状況が分かっていないようで、首を傾げている。

「この学院ってかなり敷地広いだろう？探険したら面白そうだと思っ
て！」

確かにこの学院はかなり敷地が広い。

村ひとつぐらいの広さは余裕であるだろう。

探険をしたいといレオの提案も分からないでもない。

しかし純粹（悪く言えば子供っぽい）な彼とは違って、少々面倒くさがりだったカイルは明らかにどうでもいい様子。

「…俺はいいから一人で行ってきてくれ。」

そう言うのと先程までと同じように顔を窓の方向へ戻した。

どうやらその態度が気に食わないらしく、レオは何だか不満げな表情を浮かべている。

「探検って男の浪漫だろ？何でそうめんどくさそうにするのかねえ……」

浪漫だか何だか知らないが、今のカイルには誘われても全く行く気はしない。

”明らかにいいところのお坊っちゃんとは思えない公爵子息”と一緒に探検なんぞしたら、いくつ命があっても足りない。

この二日間でそれを既に学んでいた。

レオンハルト・ファーガスという人間はある意味行動力があると言えるし、ある意味では考えなしと言える性格の持ち主だった（これも彼の難点の一つだ）。

彼は普通にいい人だと思うのだが、その性格のせいでどうもトラブルを引き起こす気質があるようだ。

＊ ＊ ＊

一日目の夜……つまりカイルがレオと初めて会った日の夜のこと。

カイルが入浴中の時だった。

彼の数少ない趣味の一つである入浴中だったのでかなりご機嫌な様子。

昔から彼にとって入浴の時間が安らげる数少ない時なので元々好きだったが、恋仲であったマリア王女の風呂好きの影響で更にそれに拍車がかかったのである。

現代の世界で目覚めてからも毎日風呂に入っていたが、改めて風呂の良さを実感した。

二千年も経つと技術も進むらしく、風呂も昔とは大分違っている。

昔は貴族や王族は豪華なものに入っていたが、軍人や民間人などは簡易なものにしか入れなかった。

それを考えると今は恵まれていると言えるだろう。

（やはり風呂っていいものだよな…）

そんなことを思いながら、カイルが洗髪をしようとシャワーの蛇口をひねろうとしていた時だった。

「やっべ、タオル忘れてた。」

その声はルームメイトのもの。

どうもタオルを忘れて来てしまったようである。

寮の一階にある”洗濯機”という便利な機械に入れるのを忘れてしまったのだろう（昔は手洗いだっただので初めて見た時はかなり驚いた）。

確かレオがバスルームから出てきたのと入れ替わるように自分が入ったのだから、時間帯も合っている。

髪をお湯で洗ってから左にある台の上ののっているシャンプーに手を伸ばそうとしていた。

そのときふと気が付く。

自分のもの以外のタオルがそこにあることに。

「あれ、開いてんな…?」

ガチャッ…

バスルームの扉が開く音がした。鍵を締め忘れたか。

タオルをバスルームに置いてきてしまったことにきつと気がついて取りに来たのだろう。

頭の中の一部分が冷静に状況を告げる。

しかしそれ以外はかなりパニック状態だった。

今ここでその理由を述べるわけにはいかないが、ともかくカイルにしては珍しくかなり混乱していた…

——「なあカイル…俺の…」

シャワーカーテンを開けようとしていたレオの顔面に何かが叩きつけられた。

「痛っ…!」

その痛さに暫く悶絶していたレオだったが、やがて身を起こすと自分に叩きつけられたモノの正体を知る。

「これって俺のタオル…？」

まさしくそれは彼が探していたタオルだった。

”タオルって叩きつけられるとあんなに痛いのか？”と普通思うところだが、彼はそこは気にせずにシャワーカーテンの向こうにいるルームメイトに文句を言おうと、シャワーカーテンを開けようとした。

「貴様それでも公爵子息か？」

その迫力のある声に開けようとしていたシャワーカーテンから手を離す。

「普通入浴中に入ってこないのがマナーというものだろう。」

明らかに怒っているようで、口調がいつもと違う。

軍人のような話し方をしていたが、今のカイルは士官学校でダメな生徒を叱咤する教官のよう（実際に見たことはないが）だった。殺気も感じるのは気のせいではない。

「は、はいすいませんでしたっ！」

レオが思わず敬語でしかも敬礼をしてしまうのも無理はないだろう。

それほどにカイルの殺気と声は恐ろしかった。

「全く公爵家ではこんなことも教えないのか？」

嘲るようにカイルが鼻で笑った。その視線の先には土下座をしている金糸雀色の髪的美少年：レオがいた。

「お許しくださいどうか御慈悲を：フォルトウナ様：シリウス様：」

最早レオは神（？）に祈ってすらいた。

（祈った二人のうち一人は目の前にいる鬼と化した青髪的美少年なので、ぶっちゃけ祈っても無駄だと言うことを彼は知らない）

その場を傍観していたロゼットだったが、まさか鬼と化している主に

” 貴方が鍵を締め忘れたのも原因ではないんですか？ ”

という命知らず（的確）な発言ができる筈もなく、ただ未だに土下座をする少年に同情しながらその場を傍観し続けていたとか。

まあカイルにもあそこまで怒っていた理由があるのだが、ここでは述べないことにしよう。

＊ ＊ ＊

：ともかく、彼と探検だなんてことをする気にはなれなかったカイルは後ろから聞こえてくる声にため息をついた。

「なあ探検行こうぜー？」

未だそう言うレオにまた、ため息をつく。

「だから言ってるだろう？行きたいのなら君一人で行けばいい。生憎、俺はそういう気分じゃない。大体、探検なんて子供じみた真似する気にはなれないしな。」

呆れたように言うカイルの言葉にレオは眉を少し吊り上げる。

「子供じみた…って俺達まだ十五だろ、子供じゃねーか…？なんでそう言う爺くさ…」

レオはそこで言葉を止めた。

一瞬何かを考えているようだったが、次の瞬間には意地悪そうな笑みが浮かんでいた。

「そうだよなー、仕方ないか。」カイルお爺ちゃん”は若者の俺の

やることについていけないもんなー。」

その言葉に紅茶を飲んでいたカイルの動作が止まる。

その様子を見たレオは”してやった”と言わんばかりにまた意地悪
そんな笑みを浮かべた。

「風呂好きだし、最近疲れているから腰とかも悪いんだろ？誘った
俺が悪かった。…というわけで”カイルお爺ちゃん”はここで待つ
ていていいぞ、俺一人で行って来る。」

勿論レオは探険に一人で行くつもりなど毛頭無い。

ただ自分が彼に

”爺くせーなあ”

と言うと、かなり不満げにしていたので、それを利用して連れて行
こうという作戦だった。

「俺は爺じゃない！」

「つてことは探険行けるよな？」

「当たり前だ！」

どうやらレオの作戦は成功した模様。

レオは目の前にいるかなりやる気のカイルを見て、少しほくそ笑ん
だ。

（マスター…そういうところは子供っぽいのに…）

そのロゼットの胸の内は誰も知らない…。

こうして二人と一匹は広い敷地を探検することになったのだが……

その話はまた別の機会に語ることにするとしよう。

&l t;4&g t;s o t t o v o c e? (後書き)

なんかどうしてもギャグになっちゃうんですね… (笑)

では感想やご指摘などお待ちしております。

&l t ; 5 & g t ; s o n o r i t e , ? (前書き)

話の後半に出てくるワケの分からん横文字ですが…

エスターテが夏の季節

メトポローンが秋の季節

という感じです。

ちなみに

プリマヴェーラが春の季節

インビエルノが冬の季節です。

凝った設定でさえません…。

&l t;5&g t; s o n o r i t e、?

アルナイル王国軍特務師団第二部隊隊長、アラン・ウェルフオードが王立レグルス魔術学院の教師になったのは三年前だ。

極めて優秀だった彼が何故軍人から教師へとなったかは、ここでは触れないでおくとして。

ともかく彼は非常に驚いていた。
手に取った一枚の紙に。

その紙は今年の筆記試験の解答用紙だ。

右上には達筆な字で、

”カイル・プレンティス”と書かれている。

あまり十代半ばの少年らしくない字だったが、彼が驚いているのはそこではない。

「まさかこの問題を解ける子がいるとはね…」

”問99”・これが解ける受験者は初めて見た。

この最終問題は毎年学院側が満点の受験者を出さない（学院長の意地）ために、教師でさえ解けない最難関の問題を出題している。

今年は、アルカディア創世時代に使用されていたとされるアルト文字の文章が出題された。

それこそかなり考古学の道を極めた専門家でないと、存在すら知らない文字である。

しかしこの少年は何の迷いもなく解答を書いている。

この最終問題を解けたのは一人だけなので、カンニングの可能性は無い等しい。

本を見ようにも、まず一般的に知られていない文字の本が書店にあるとは考えにくいだろう。

そもそもこんな問題が出題されるとは普通思ふまい。

となると、彼が自力でこの問題を解いたのだと考えるのが自然だ。

「カイル・プレンティス……か。面白そうな子が入ってきたね……」

アランは解答用紙を机の上に置くと、夕焼けの空が見える窓に視線を移した。

* * *

…人間とはこんなに話す生き物だっただろうか。

隣を見るとレオは最早魂（？）が出て、脱け殻と化している。

入学式が始まって早1時間半。

最後に学院長の話だったのだが、学院長不在の為副学院長が代理で話すことになったらしい。

学院長の話は毎年短いとレオが言っていたので、長い話を聞くのが苦手なカイル（普通誰でもそうだと思うが）は安心して話していたのだが。しかしその安心は副学院長が話始めたことによって、真逆の心慮へと変化していた。

レオによると、学院長は一分もしないうちに話を終わらすことで有名で、副学院長はイベントなんかで学院長の代理で話すとなるとそれは物凄く長〜く話すんだとか。

”長〜く”という部分がかなり間を伸ばしていたのが気になったのだが…

（こういうことだったとはな…）

副学院長が話始めて既に一時間が経過。

ぶっちゃけ誰も話を聞いていないのが現状なのだが、それに気付いていないのかまだまだ話続ける副学院長。

平常心を保とうとするカイルだが、彼にも我慢の限界というものがある。

決して顔には出すまいとしていたが、実際かなり彼はイライラしていた。

それは不在の学院長を恨むまで発展している。

周りを見れば疲れきった表情をして副学院長を睨んでいた。

きっと彼らもカイルと同じなのだろう。

「やっと終わったぁー！」

レオがそう言うのも無理はない。

結局副学院長のありがた〜い(?) 話はその後も続き、先程ようやく終わったところだ。

入学式の後には各クラスに移動して”ホームルーム”というのをやるらしい。

ちなみにカイルとレオは同じA組だ。

「確か：6階でよかったんだよね？」

「：一応そうみたいだが。」

どうも周りの視線が気になる。

レオは気付いていない様だが、明らかに女子生徒の目が彼に釘づけになっていた。

同性の自分から見ても容姿端麗な彼に、異性の彼女らが注目するのも無理はないだろう。

問題は本人が全く気付いていないということだ。

「どうしたんだカイル？」

心底不思議そうな顔をしている。

「：いや、何でもない。」

心の中でため息をつくとき、ホームルーム棟へと歩きだした。

実は半分以上がカイルへの視線だったりするのだが、勿論本人は気

付いていない。

ホームルーム棟 4階・1―A教室

カイルの席は窓側の一番後ろの席だった。

「俺はカイルの隣だな。」

ニカッとレオが笑ってカイルの隣の席へ着く。

入学したのが七百名だったので、一クラス三十五人で全部で20クラス。

AからTまでであるらしい。

（教師の数は足りるのだろうか？）

「あれ、さっきまでロゼットいなかったよな？」

カイルの肩にはさも当然の如くロゼットが乗っていた。

そう、彼女は入学式の途中までカイルの側にいたのだが副学院長の話が四十五分を過ぎたところで、アリーナから姿を消した。

どうやらさすがに耐えられなかったらしい。

あの時は本当にロゼットが心底羨ましかった。

「さっき廊下の窓から入って来たみたいだ。」

「うん、ホント俺ロゼットが羨ましいよ。」

レオの言葉にカイルは苦笑いを浮かべるしかなかった。

その時、ガラッという教室の扉が開く音がする。

入ってきたのは萌黄色の髪をした二十代後半ぐらいの男。

ざわついていた教室が途端に静かになり、生徒達も各々自分の席に着いた。

それを見た男はニコツと笑って、教壇の前に立った。

「初めまして。僕がこの一年A組の担任のアラン・ウェルフォードです。受け持つ授業は歴史、専門は考古学。取り敢えずよろしくね」

一見ただの優男だが、カイルにはそうとは思えなかった。

（あの雰囲気…おそらく元軍人か何かだろうが…）

人当たりのいい笑みを浮かべる表情の下に何か別のモノを隠し持っている気がする。

それにマナの気配が強い。

魔力が高い証拠だ。

「まあ僕の紹介はいいとして…。座学を受けるのは講義棟、実技を受けるのは訓練場とかアリーナだからこの教室で過ごす時間は朝と夕方だけ。そこらへんはみんなも分かってるよね。…えっと後は…この学院はみんなも知っているとおりの単位制だから授業をサボったりしまくると、単位がもらえなくて留年という形になるから気を付けるように。…じゃあ、あの長い話を聞いた後には僕の話聞くのも疲れると思うからこれぐらいにしておこうか。」

そう言うと彼は教壇の上に乗せてある紙を生徒に配り始める。

「これ時間割表だから、なくさないようにしっかり持ってたね。」

その紙は彼の言うとおり時間割が書かれていた。

一週間が九日だから、そのうち七日が授業があるらしい。

「基本的にオプスキュリテとカルディアの日は授業はないから外出するのも全然構わないけど、羽目を外しすぎて次の日休んだりとかしないようにすること。昼食は寮にある食堂と、この棟の一階にある大食堂でとるように。：何か質問は？」

オプスキュリテやカルディアというのはアルカディアの一週間の暦だ。

創世暦も新世暦も同じように精霊の名を用いている。

順に、

光のmanaを司るルーチェ

火のmanaを司るイグニス

水のmanaを司るフォンテーヌ

風のmanaを司るミストラル

雷のmanaを司るクラウド

地のmanaを司るアルトウーラ

氷のmanaを司るラヴィーネ

闇のマナを司るオプスキュリテ
全ての精霊の王でありマナそのものを司るカルディア。

カイルは、属性のマナを司る八大精霊とは契約をしているものの、
精霊王と謳われるカルディアとは契約をしていないし、会ったこと
すらない。

フォンテーヌがカルディアのことを言っていたから、存在するのは
確かなようだが。

（そういえば精霊召喚もしてなかったな…）

精霊召喚とは契約召喚術のなかでも高位なモノで、八大精霊の召喚
に成功したのは歴史上カイル…”シリウス・クライン”のみ。

精霊召喚でもかなりの魔力を消費するというのに、属性のマナを司
る八大精霊となると並みの魔術士では命を落としかねない。

かなり力のある魔術士でも命を落とさずとも、それに近い状態にな
るらしく誰も召喚しようとはしなかった。

二千年前でさえそうだったのだから、現代では下位精霊の召喚だけ
でも命を落とすだろう。

もともと現代では契約召喚術自体が失われているのだが。

「宜しいですか？」

カイルの座席の列の一番前にいる菖蒲色の髪の少女が手を挙げた。

それを見レオが驚いた表情をしたのが少々気になったが、言及しようとはしなかった。

「えっと君は確か…」

「フロレンス・エリオットですわ、ウェルフォード先生。」

いかにもお嬢様という感じの話し方をする少女だ。

「ああ、やっぱりカレンさんの…」

「あくまで”異母妹”ですわ。あの人とは同じ血が半分しか流れてませんもの。」

その言い方は某性格最悪王女を激しく思い出させる。

アランは苦笑いをその端正な顔に浮かべていた。

「それより質問の方ですわ…。この時間割を見る限り”魔術基礎理論”や”魔術錬成・基礎”といった基本の科目が多いようですけれど、レベル別授業があると聞いていたのですが、それはいつあるんですの？」

「お、イイ質問だね。」

苦笑いから一転して楽しそうな笑みへと表情が変わる。

「レベル別授業があるのは確かだけど、それが始まるのは夏期休業が終わった後。エスターテ3の月にある試験の結果でレベルが決ま

るんだよ。優秀な方からエナ、ジイオ、トゥリア、テセラってね。エナはこの三十五人中で、一人いるかいないかのかなり優秀なレベル。ジイオはエナにはとどかないけど優秀なレベル。トゥリアが平均ってところくらい、多分ここが一番人数が多いかな。そして僕としてはあんまりなって欲しくない平均より下のテセラ。この四つのレベルがあるんだ。」

「レベルは卒業まで固定されているんですの？」

「違うよ。試験の度にレベルは上がったたり下がったりする。勿論変わらない人もいるけどね。あ：それとメトポローン4の月にあるクラスマッチの結果も考慮されるかな。」

”クラスマッチ”というのはレオから聞いたことがある。

何でも各クラスの代表者達がトーナメント形式で戦闘試合をするらしい。

二年に一回の闘技大会よりは規模は小さいが、それでもかなり盛り上がるんだとか。

「質問はもういいかな？」

菖蒲色の髪の少女：フロレンスが頷くと、彼はニツコリと笑う。

「じゃあ僕はこれからやることの準備があるから少し待ってて。」
そう言う教室を急いで出ていってしまった。

カイルはそれを確認すると、隣のレオに声をかけた。

「なあレオ。」

「どうしたんだ？」

「あの先程の……」

その言葉だけで察したのだろう、レオは納得した表情になった。

「フローレンスな、俺の幼馴染み。エリオット公爵家の次女、俺はフローラって呼んでるけど。」

それである話し方か。

どちらかというと貴族な感じがしたのだが、爵位を持つ名家の令嬢らしい。

「基本的にはイイやつなんだけど、ただな……」

レオの表情が少し曇った気がする。

「ただ？」

その先を聞こうと思ったが、それは叶わなかった。

1年A組の担任、アランが教室に入ってきたからである。

「ごめんね、どうも準備終わってたみたい。じゃあ訓練場に行こうか……模擬戦やりに。」

&l t; 6 & g t; s o n o r i t e ' ?

「模擬戦…?」

誰かがそう呟いた。

模擬戦とは、仕官学校の演習で行われる模擬試験ならぬ模擬戦闘のことだ。

アルナイル王国軍はいわゆる軍隊とは違い、国内の治安維持を主な目的としている。

前述したかもしれないが、アルナイル王国はこの世界に現存する唯一の国家で、戦争をしようにも敵国がない。

だから軍の役割が治安維持となっているのは、至極当然のことだと言える。

さて、話を戻そう。

仕官学校で模擬戦を演習に取り入れるのは、簡単に言うと敵国のないこの国の軍が、腰抜けになるのを防ぐためである。

いざというときに使い物にならない軍など役立たずでしかない。

そうならないためにも、仕官学校では模擬戦という生徒同士の戦いの演習があるのだ。

そこで実力的に同等の者同士が闘うことで、互いの戦闘能力を高めていくことができる。

…が、それはあくまで仕官学校の、しかも上級クラスの話であって。王立学術院ではそんなものはなかったし、大体仕官学校以外で模擬戦などやらない筈だ。

現代では違いかもしれないが、まさか魔術初心者と言っても過言ではない者達がいるのに、いきなり模擬戦をやるなどと…

（この男、一体何を考えている…？）

何となく喰えない男だとは思ったが、その笑顔の下に隠れている真意は全く読み取れない。

こういうタイプは正直苦手だ。

昔も部下にいたが、その人物には口で勝てたためしがない。

いつも笑顔を浮かべているが、その表情からは一切心の内が読み取れず、そのくせこちらのことは全てお見通し。

やりにくいとしか言えない。

教壇に立つ男もきっとそうだろう。

全くいい予感がしない。

どうやら肩に乗っているロゼットも同じ様で、無意識のうちかもしれないが若干その灰色の毛を逆立たせていた。

「模擬戦って言ってもそんなに本格的なものじゃないし、僕が君達の実力を把握するための簡単なものだから。」

安心していいよと言う彼の笑顔の下に、何か別の思惑があるような気がしてカイルは少し目を細めた。

——第三訓練場

「汝を貫くは雷帝の憤怒」

菖蒲色の髪の少女、フローレンスの足下に黄色の術式陣が展開され

る。

雷属性の魔術を発動する合図だ。

「サンダーボルト！」

相手の頭上から一筋の雷が落ちる。

そのまま直撃……ではなく、当たる直前のところで何かに阻まれるように拡散した。

「はい、そこまで。二人ともお疲れ様。」

笑顔でそう言うのは、1―A担任教師のアラン。

彼はパチパチと軽く拍手をしながら、中央にいる二人の方へ近寄ってくる。

「なかなか凄かったよ。…特にエリオットさんは、最後中級の攻撃術まで使えていたし。」

それを聞いて一瞬照れたような表情になるフローレンスだが、その表情はすぐに真剣なモノへと変わった。

「べっ…別に大したことありませんわ。中級ですからまだ使いこなせてなくて…。威力も大分弱いですし…。」

そう。彼女の言う通り、雷属性の攻撃術である”サンダーボルト”は本来ならもっと強力である。

おそらく魔力の高さと術のレベルがつりあっておらず、ああなったのであろう。

攻撃術も召喚契約術と同じように、個々の魔力の高さによって差異がある。

その差異とは、使える術と術の精度だ。

主に攻撃術は四つの階級に分けられる。

”下級”は基本中の基本。

”中級”は平均程度の、いわゆる一般的な魔術士は使えるモノ。

”上級”になると魔力の高い限られた者のみしか使うことができない。

そして、”特級”は二千年前ですら使える魔術士は片方の指の本数にも満たないという最高難関の階級である。

「それでも充分凄いと思うけどね僕は。さすがカレンさんの…」

「模擬戦は終わりましたのよね？私はあちらに戻らせていただきま
すわ。」

途端不機嫌になったフローレンスは、アランから顔を背けると、ス
タスタとギャラリーの方へ歩いて行ってしまった。

どう見たってわざとだろう。

フローレンスの模擬戦を見ていたカイルは呆れたようにため息をつ
く。

（アイツと同じで何がしたいのかよく分からないな、あの教師…）

カイルは、微妙な顔で先ほどのやり取りを見ていたフローレンスの
幼馴染みだという、レオに声をかけた。

「なあレオ。さっき話していたことの続きだが…」

「フローラのことか？」

カイルがそれに頷くと、レオは意地の悪い笑みを浮かべる。

「もしかしてカイル、おまえ…」

言葉の意味が分からず首を傾げると、彼の意地の悪い笑みは更に深くなった。

「そりゃ決まってんだろ。アイツに…フローラに惚れたのかってこと。」

「御期待にそえず申し訳ないが、それは有り得んな。」

公爵子息殿のからかいは、その相手によって一刀両断された。

つまらなそうに舌打ちをするレオだったが、本当にそうなのだから仕方がない。

確かにフロレンスというあの菖蒲色の髪をした少女は美人の部類に入るだろう。

きつと数多くの異性から好意を寄せられているに違いない。

おまけに公爵家の令嬢なのだし。

それでも自分がマリア王女以外を好きになるなんて、ロゼットの料理が改善されることと同じくらい有り得ないことなのだ。

「…で、フローラのことなんだけどな。」

レオが苦笑いを浮かべているのが分かる。

「アイツには姉貴がいるんだよ、いつこ年上の。」

姉がいるのは教室でのことで知っていたが、それと彼の苦笑いがどう関係するのかよく分からない。

「カレンっていうんだけどさ、この学院の生徒会長やってんだよ。」

「生徒…会長…とは…何だ？」

話の腰を折るようで悪い気はしたが、聞かずにはいられなかった。

「…は？」

その言葉に心底驚いたようで、レオは目を大きく見開いている。

「おまえそんなことも知らないのか!？」

確かに何となく世間知らずって感じはしてたけどよ…と呟く彼は呆れている様子。

そんなこと言われても二千年前はそんな言葉使われてなかったから、知っているわけがない。

…それを言うならそのことをレオが知っているわけもないのだが。

とにかくその”生徒会長”とやらは言葉から察するに、何かの長のようだ。

「生徒会長つつうのはな、この学院の生徒のトップだ。生徒会執行部っていう生徒の代表的存在である組織があつて、そのリーダーなわけ。分かるか？」

カイルが頷くとレオは満足そうに笑い、言葉が続けた。

「生徒会執行部は基本的には生徒会をまとめて、生徒の学院生活を改善・向上させることが主な目的なんだけどな、その執行部のメンバーの決め方っていうのが学院のしきたりでさ…」

そこで言葉を止めて深いため息をついた。

何故だろう、少し哀れみを覚えるのは。

「創立以来からメンバーになるための方法は、現役員を決闘で倒すことのみ…なんだよな。」

「ということは…」

「そうだな、生徒会長になりたかったら現生徒会長を決闘で倒さなきゃいけないってこと。」

もつとまじな決め方があるのではないだろうか。

「で、その決闘…またの名を生徒会執行部役員決定試合はいわゆる何でもあり対決でな、相手が降参するまで決着はつかない。勿論決闘は公開されるから、大体は審判の先生が止めるし。死んだ奴とか

はいないけど…」

ただな…と言って言葉を濁した。

「去年の入学式の一週間ぐらいたった後にいきなり生徒会長への決闘の申し込みがあつてな…。そのときの生徒会は歴代最強って言われるぐらい強くて、決闘も勝ち続けていたし今回もその会長が勝つて終わりだって言われてたんだ。何より決闘の申し込みをしてきたのは新入生の女生徒だったからな。…俺は直接見たわけじゃねーからよく知らないけど…。一瞬でその女生徒が、歴代最強とまで言われていた生徒会の長を倒しちまったらしい。その女生徒が会長に就任した当時こそ決闘の申し込みが絶えなかったんだが、結局誰も彼女には勝てず決闘の申し込みも無くなった…。その女生徒ってのが、フローラの姉のカレンってワケだ。」

まあ話は分かったが。

「成る程。姉への劣等感からか。」

「はつきり言うなおまえ…。つまりそういうことだよ。姉が実力がある、その妹であるフローラにも当然周囲は期待するワケだ。だから周囲はいつもアイツとカレンを比較してる。…でもカレンの方が実力はかなり上だから”お姉さんに比べると駄目ね”とか言われるからプレッシャーが半端ない。おまけにカレンとフローラは腹違いの姉妹で、カレンの母さんは王家の血を継ぐ公爵家の娘。対するフローラの母さんは、エリオット公爵が一目惚れした下級貴族の家の次女。これについても周りはごちゃごちゃ言うし。小さい頃は仲良かったんだけど、そのせいでフローラはカレンのことを嫌うようになってな。ま、カレンは妹が自分を嫌う理由も分かってるから何

も言おうとしないし…。」

苦笑いをしていた理由が分かった。
教室では確かに話しくいだろう。

あの某性格最悪王女と似てるとか思ってしまったが、そうではない
ようだ。

なんだかとても申し訳ない。

「そういえば…」

「ん？」

「話は変わるが、何で決闘などしてまでたかが役員をやりたいがるんだ？」

そんなことまでしてやりたがる訳が分からない。

役員をやっても給料が出たりするわけじゃないだろうし。

「たかが」じゃないんだなこれが。」

レオは得意げに笑う。

…「たかが」じゃないとはどういうことだろうか？

「役員になると色んな特権があるってのもあるが、一番の理由は…権力拡大の為ってところだな。」

「役員をやるのが権力拡大に繋がるのか？」

「…このアルナイル王国の軍と議会の対立は知ってるよな？」

それは昔からあったことだ。

（というかまだ続いてたのか。）

「軍が治安維持、議会が行政と司法。普通に見れば議会側の方が権力があるんだけど、軍には何しろ武力がある。議会が”下手な動きしたらそれで制圧される可能性がある”と考えてるとなると、そうとも言えない。だからって軍も一応国王に仕えているから、そう簡単に武力制圧なんてマネは出来ない筈。王家の力は絶大だからな。つまり王家が軍と議会の権力拡大の抑止力になってるってワケだ。…だけど最近はその抑止力が弱まってるから、両方とも権力拡大を狙って動いてる。学院もそれに巻き込まれてるんだよ。」

「はあ…。」

流石は公爵子息。

そのへんの知識はかなりある。

「この学院が多額の寄付で成り立ってることは知ってると思うけど、誰が寄付してるのか知ってるか？」

「爵位を持つ名家や貴族とかだろう？」

「そう。で、寄付金が高い順で決まる理事が上から六人。理事というのは学院の方針を決める権限を持つ、学院の代表権を持つ団体。ちなみに理事は全部で十人。…ここまですればもう分かるだろ？」

「まさか後の四人は…生徒会執行部の役員の…」

「正解。そのままそいつらの親が理事の残り四人になるんだよ。中でも生徒会長の親は理事長になる。学院長ですら下手なマネは出来ない役職の人間だ。そうなると理事長にでもなればこの学院を好きにできるし、教育方針ですら決められるから自由に生徒をコントロールできる。たとえば理事長にならなくても、この学院の理事ってだけで立派なステータス。しかも学院を創立したのは昔の国王、王家のご機嫌もとれる。そして自分の家の繁栄、それにどっちか一方の権力拡大にも繋がる。まさに一石二鳥どころか一石四鳥と言っても過言じゃない。」

「それで生徒が役員をやりたいがる訳か…」

その呟きにレオは満足げに頷いた。

（もしそうだとするなら…）

——ひよっとしたら

「レオ…君は役員になろうとは思わないのか？」

一瞬不思議そうな顔をしていたが、それはすぐに笑顔へと変わる。

「俺が？…そんなこと何でしなきゃなんねーんだよ。既に父さんが理事だからそんなことしなくてもいいし。」

（※こんなんでも一応公爵子息。）

「大体、兄貴の時に理事長やってるしな。別に続けてやらなくても…。」

”兄貴”という言葉について聞こうとしたが、それは叶わなかった。

「カイル・プレンティスくん！相手が待ちくたびれてるよー！」

…無駄に爽やかな声が後方から聞こえてきたからである。

——「全く君はいつまで人を待たせるつもりなんだい、プレンティス？」

そう言うのは黒縁眼鏡の栗毛の少年。

「…ともかく、僕はジャッド・ダグラス。一応王国議会で父が…」

「自己紹介は後で聞く。待たせたのはすまなかった。早速始めよう。」

あしらうように極めて冷静に言うカイルだったが、どうもそれが黒縁眼鏡：ジャッドは気にさわったらしく、“カチン”という効果音が聞こえてきた。

表情で怒っているのが分かるのだが。

「君がそう言うのなら僕は構わないさ。…後で自己紹介なんて聞けないほど叩き潰すからな」

どうやら怒らせてしまったらしい。

（王国議会と言っていたから…多分貴族の家の息子だろう。）

どうも貴族は昔から苦手だ。

「…じゃあ結界術をかけてもいいかな？」

険悪な雰囲気の中、アランがカイルとジャッドの両方に結界術をかける。

先程のサンダーボルトが拡散した理由はここにあった。

模擬戦が始まる直前にアランがどちらにも結界術をかけていたおかげで、今のところ怪我人はいない。

そもそも術が結界に触れたと判断された時点で模擬戦が終了するため、怪我などしたりする筈がないのだが。

「じゃあ二人とも準備はいいね?…始めっ!」

カイルVSジャッドの対決の火蓋が今切られた……

&l t;6&g t;s o n o r i t e、? (後書き)

こんな駄文を読んでもくださった皆様こんばんは（こんにちは）。
一週間ぶりの投稿です。相変わらず文才の”ぶ”の字もない作者なので、変な文章になっていると思います。そういう箇所を発見された方は、感想に書いていただけると助かります。

ではまた次回☆

&l t.; 7 & g t.; s o n o r i t e . ? (前書き)

今回はいつもより短めです。

&l t;7&g t; s o n o r i t e ' ?

こちらは全くと言っていいほど相手の情報を知らない。

戦場において一番恐ろしいことは、”自分が敵を知らないまま戦うこと”だと仕官学校時代からさんざん叩き込まれてきた。

未知の敵を相手に闇雲に戦っても意味がない。

聞こえてくる野次馬クラスメイトの声が耳障りだが：

――まずは情報収集だ。

昔は一流の魔術士ならマナの気配を感知することが出来、さらにはどの属性のマナかを察知することが可能だった。

：どうせ現代の魔術士達には無理なことなのだろうが。

相手はこちらが動かないことに何を思ったか知らないが、マナを体内に吸収し始めている。

魔術を使う気だ。

（このマナの気配…水属性の使い手か…）

意識を集中させると、マナの気配が伝わってくる。

どうやら予想通りだったようで、相手の足元に青い術式陣が展開された。

「清廉なる水泡、邪悪を捕えし牢と化せ！」

（この詠唱は…水属性の中級攻撃術…）

先程のあの教師の言葉が本当なら、この年齢で中級攻撃術を使えるということは称賛に価するらしい。

それならば、この少年も優秀だと言えるのだろう。

…しかしあくまでそれは現代での話。

「プリズンバブル！」

魔術が発達していたとされているらしい二千年前で”黒騎士”の異名で恐れられていたカイルにとっては、そんなものは脅威でも何でもなかった。

自身の足元から湧いてこようとしている水泡から足のやり場を素早く移し、術を回避する。

そしてさほど大きくない水泡が、数秒前にカイルがいた所に出現した。

それを見ると対戦相手の少年、ジャッドは軽く舌打ちをする。

（やはり魔力と術のレベルがつりあっていないのか…。）

どうやらフローレンスと同様、まだ中級を使いこなせる魔力がないようだ。

その証拠に詠唱完了から術の発動までの時間が長い。

しかも、見る限りだが威力も自分のモノと比べるとはるかに劣る。

水泡が消え、場に静寂がもたらされた。

先程まで聞こえていた野次馬達の声もすっかり止んでいる。

「今のは避けられたみたいだな。」

相手がこちらを睨んでいるのは気のせいではない。

「でもこれで分かった筈だ…」

そこで言葉を切ると嘲るように鼻で笑った。

「プレンティス、君が僕に勝てないってことが。」

目的が勝ち負けなのかは置いておくとして、言葉の意味が理解できない。

「君は火属性、僕は水属性…君が勝つ確率は0に近いだろう？」

属性がある魔術…特に攻撃術において、各属性には弱点属性と得意属性が存在する。

光は闇に弱く、闇に強い。
水は雷に弱く、火に強い。
火は水に弱く、氷に強い。
風は氷に弱く、地に強い。
地は風に弱く、雷に強い。
氷は火に弱く、風に強い。
雷は地に弱く、水に強い。
闇は光に弱く、光に強い。

例えば火属性の攻撃術の場合、弱点属性である水属性の使い手に攻撃すると、威力が二分の一になる。

逆に得意属性である氷属性の使い手に攻撃すると威力は二倍になる。

つまり火属性の使い手と水属性の使い手が戦う場合、火属性の使い手が圧倒的不利になるわけだ。

しかし魔術士一人が数々の属性を使っていた二千年前では、一つの属性しかない魔物（三つの体内機能が異常化し、突然変異した生物の総称）との戦闘以外ではあまり重要視されないことだった。

おそらく一人が一属性、稀に二属性しか使えない現代においては重要視されていることなのだろう。

——だがそれにしても…

（…それだけで勝敗が決まるものなのか…？）

一応”カイル・プレンティス”としての設定では火属性しか使えないことになっている。

普通に見れば水属性の使い手である相手の方が有利だが、あくまで実力が同じ程度の場合だ。

しかしカイルとジャッドの実力は天と地ほどの差がある（ここで本気を出す気は全くないが）。

それにこれは純粹な戦闘ではなく、自身を覆う結界に攻撃が当たった瞬間に終了：攻撃を当てた側の勝利となる試合だ。

弱点属性とか得意属性とかはあまり関係ないだろう。

何せ攻撃が当たればいいだけなのだから。

：それなのに自信満々に鼻で笑って勝利宣言（？）をした。

不可解だ。

「どうやら意味が分かってないらしい：」

ジャッドは不敵に微笑むと詠唱を開始した。

「清浄なる水流、火勢から我を護れ！」

先程の”プリズンバブル”よりもマナが吸収されていく時間が長い。ここでファイアボールを使えば決着は着いただろうが、折角なので取り敢えず何もしないでおいた。

「フロウベール！」

流れる水のドームがジャッドを包むように形成されていく。

「君は知らないだろうけどこの術は火属性攻撃術をはね返すんだ。：つまり学院長の結界を破壊した君のファイアボール一撃でさえ、この術の前では無力なんだよ。：まあ破られたとしても、すぐに再生するからな。そして君は魔力を使い果たし、僕が攻撃を当てて終わり。」

君に勝ち目はない、と付け足してまたもや不敵な笑みを浮かべるジャッド。

だがカイルの中では、早くもこの勝負に勝つ方法が導き出されていた。

（”一撃”か…）

カイルは無意識のうちに笑っていた。

「…何が可笑しい？」

カイルの様子を怪訝に思ったのか、ジャッドの眉間に皺が寄っている。

「勝ち目がないと君は言っていたが、それは間違いだな。」

「…何を言っている？だからこの術は…」

「例えば水が極めて高温の火に熱せられたら、普通どうなる？」

いきなり話が変わったことに驚きを隠せないジャッドだったが、それでもカイルの質問に答えた。

「沸騰して気化するだろう…一般常識だ。」

「正解。…紅焰、転回せよ。」

カイルの足元に赤い術式陣が展開される。

「破られたとしてもすぐに再生する…だがそんなこと攻撃が一撃の場合だけ通用することだろうか？」

「ファイアボールは一つの火球を対象に当てる攻撃術だ。」一撃以外の何物でもない。」

呆れたように肩をすくめるジャッドだったが、カイルはその様子を見て、更に笑みを深くする。

「君は俺が火属性の使い手だということを知っているみたいだが、それは何故？」

「決まっているだろう？ 実技試験の時に見たからだ。」

「そう。…では最後の質問。試験の時に的になっていた人形はどうなったか？」

「何故こんな下らない質問をするのか理解しかねるよ。…あの人形はプレンティス、君が…!？」

ジャッドは言葉の途中で目を見開いた。

「思い出したみたいだな。”普通”は一撃。…だが”俺の”は…」

悪戯にカイルが笑った。

「ファイアボール！」

火球が勢いよく放たれ、ジャッドを包むように形成されているフロウベールに”一つ目”が直撃する。

ジャッドの言葉通り、ファイアボールが当たった部分が熱によって沸騰し、水分が気化してそこだけ穴が開くような形になった。

それを埋めるように水流が押し寄せてくるが、間に合わずに”二つ目”が穴を通り抜ける。

「二回なんだよ。」

ガラスの割れるような音が辺り一面に響いた…。

&l t;7&g t;s o n o r i t e、? (後書き)

戦闘って上手く書けませんね…。

語彙力がないので、書くのに時間がかかります。

来月にある新人戦に向けて忙しくなってきましたので、一週間に一回くらいの更新になりますが、これからもよろしく願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3776w/>

R a g n a r o k ? ウロボロスの刻印

2011年10月10日11時43分発行